

# 夢 醉 獨 言

(案轉載)

## 鶯谷庵獨言

(勝海舟先生の父左衛門太郎氏の自傳)

夢

醉

獨

言

あれか此一兩年始て外出を止られたか毎日／＼諸々の著述物の本草談まで御當家の事實いろ／＼見だか昔より皆々名大將勇猛の諸士に至まで事々に天理を知らず諸士を抜ふ事又は世を治るの術亂世治世によらすして或は強勇にし或はぼふ悪く或はあこり女色にあはれしんを一時は功を立るといへ共久しからずして天下國家をうしなひ又は知勇の士も聖人の大法犯省く輩は始終の功を立すして其身の亡ひし例しあけてかそへかたし和漢ども皆々天理にてらして君臣の禮もなく父兄の愛もなくしてどんよくさうしや故奴全き身命を亡し家國をもうしなふ事みな／＼天の罪を受る故と初めてさとりあれか身を是まで／＼か那くたもちしはふしきたと思ふといよ／＼天の照鏡をおそれかしこみてなか／＼人の中へも顕出しがはづがしくて出来すと思ふは去ながら昔年暴惡の中よりして多くの人を金銀をもあしませ世話をやり又人々の大事故の場合も助けこやつたから夫故に少しほは天の恵みがあつた故此様にまつるんじんにしているだらふと思ふ息子かしつまい故の益友をともとして悪友につき合す武藝に遊んでいたれには孝心をばしてくれてよく兄弟を名

憐みけんとして物を遣はす龜服をもはちす龜食しあれかこまらぬよふにしてくれ娘か家内中の世話をしてくれてなにもおれ夫婦か少しも苦勞のないよふにするから今は誠の樂隱居になつたおれのよぶな小供の出来たらはななく此樂はてきまいと思ふ是もふ志きた神佛には捨られぬ身と思ふ孫や其子はよく／＼義邦の通りにして子々孫々のさかえるよふに心かけるかい、せ年は九歳からは外の事をして、學文して武術に晝夜身を送り諸々の著述本を見るへし、たの學問よりははるか増たから女子は十歳にもなつたらは髪月代を仕習てあのれか髪も人手にかゝらぬよふして縫はりし十三歳くらゐよりは我身を人の厄介にならぬよふして手習などもして人並に書く事をすへし他へかても事をかゝす一家を治むへしあれか娘は十四歳のときから手前の身の事は人の厄介になつた事はない家内中のものか却て世話になる男子は五體を強よくしてそしきをして武藝骨をり一藝は諸人にぬき出でいを逞ましくして旦那の爲には極忠をつくし親の爲には孝道を専らにして妻子にはししい下人には仁慈をかけてつかひ勤をはかたくして友達には信義をもつて交り専らにけんやくしてあこらすそふくし益友には厚くしたひて道をき、師匠をとるなら業はすこし次にても道に明らかして俊ほくの仁を恐らみて入門すへし無益の友は交るへからず多言を云事なれば目上の仁は尊敬すべし万事内輪にして慎み祖先をまつりてけかすべからず勤は半時早く出へし文

武を以て農事と思ふへし少しも若き時はひまなきよふ道々を學ぶへしひま有時は外魔か入て身を  
 くつす中たちこ遊藝にはよる事なけれ年寄は心して少しはすへし過れはあれのよふになる庭へは  
 諸木を植す畠をこしらへ農事をもすへし百姓の情をしる世間の人情に通達して心にをさめて外へ  
 出さす守へし人に藝の教受せは弟子を愛して誠を盡し氣に叶ぬものには猶々丹誠を盡すへしゑこ  
 の心を出す事なけれ萬事に厚く心を用ひする時は天理にかなひておのれの子孫に幸あらん何事も  
 勤と覺らはうき事はなかるまし第一に利欲は絶つへし夢にも見る事なけれあれは多欲だから今  
 姿になつた是は手本た高相應に物をたくはへて若友達か親類にふ慮の事があつたならはをします  
 ほどこしやるへし縁者はおのれより上の人と縁組へからす成丈にひん窮より相談すへしものれに  
 勝るとおこりかつて家來はひんほう人の子を仕ふへし年季立たらは分限の格にして片付てやるへ  
 し女色にはふけるへからす女には氣を付へし油斷するど家を破る世間に義理をはかくへからす友  
 達をは陰にて取なすへし常住坐臥ともにうわにして家事を治め主人のいかうをあとすとなしせい  
 けんの道に志て万慎みて守るときは一生安穩にして身をあやまつ事はなかるましあれは是からは  
 この道を守心たなんにしろ學問を專要にして能く上代のをしへにかなふようにするかいゝ隨分し  
 て出來ぬ事はないものたそれになれるどしまひにはらくに出来る物だけづして理外の道へいると

なかれ身を立名をあけて家を立す事はかんしんだ譬へはあれを見ろよ理外にはじりて人外の事はかりしたから祖先より代々勤めつゝいた家たがあれかひとり勤めないから家にきつを付た是か何寄の手本たは今となりて見ていく様も後悔をしたからとてしかたかない世間の者には悪慧の様にいはれて持てゐた金や道具はかしどりにあいて夫を取にやれば隠居か惡法で捨らへた道具たから何返すに及すといふし金もまた其の心持て居るからろくに挨拶もせずによこさぬは悟は向ふか尤と思ふよいかよぶの事か出ても人をはうらむものではないみんなこちらのわるいと思ふ心かゝんしんた怨敵には恩を以てこたへは間違はないわれは此度も頭よりお志こめられてから取扱のものとをうらむたかよく考へて見たらはみんなおれか身より火事を出したと氣かついたからまいはん／＼罪をろほしにはほけ經をよんて陰なからおれにつらく當つたとおれか心得達た仁々はりつしんするよぶに祈てやるから其せいか此ころはおれの體も丈夫になつて家のうちになにもさいなんもなく親子兄弟とも一言のいさかひもなく毎日／＼笑てくらすは誠に奇妙のものたゞ思ふから子々孫々もこぶしたちはよからうと氣かつめた故にひまにあかして折々出付た善惡の報ひをよく／＼あちはふ／＼恐多くも東照宮の御幼少の御事數年の御なんせん故にかくの如くに太平つゝき萬事さかへるうれひ忘れ妻子をあん樂にすこし且は先祖の勤苦思ひやるへし夫より子孫

夢 酔 横 言

はふところ手をして先祖の貢た高を取うけて昔を忘れて美服をき美味をくらひろくの御奉公をも  
勤めさるは不忠不義ならすやこゝをよくもつて見る今勤めは疊の上の疊事たから少もきつか  
ひかないは萬一すへつてころぶ位の事たせめては朝は早く起く其身の勤めにかゝり夜は心を安し  
て寝て淡白のものを食しおこりをはふひて諸道に心をつくし不斷のきるいは破れされは是として  
勤の服はあかのつかされは是とし家居は雨もらされはよしとし疊きれされは是として専らにけん  
素にしてよく家事を治め勤めつき合には身分に應して事をすへしなんほけんやくをすればとて客  
しよくはすへからす儉客の二字を味をふてすへし數卷の書物をよんでも心得か違ふとやろふの本  
箱字引になるからこゝを間違ぬよふにすへし武藝もそうたふころの業を學ふと支體かたまりてや  
ろふの刀掛になる故其心すへし人間になるにも其通りたゞくよく迷ふどうはへは人間て心は犬猫  
もどふよふになる眞人間になるよふにい心懸るか専一た文武諸藝ともみなく學ふて心を用ひさ  
れは不殘このかたわとなるかたわとなるなほは學はぬかま志たよくくこの心を間違ぬよふに守  
か肝要た子々孫どもかたくあれかいふとを用ゆへし先にものふ通りあれは之まてもなんにも文字  
のむつかしい事はよめぬからこゝにかくにもかなのちかひも多くあるからよくく考へてよむへ  
し天保十四寅年の初冬於鷺谷庵かきつゝりぬ

言 獨 醉 夢

左衛門太郎入道

夢

醉

老

(六)

# 氣心は勤身

氣はなかくこゝろはひろくいろうすく

つとめはかたく身をはもつへし

外に

まなへたしゆふにならふみちのへの露の

いのちのあすきゆるとも

あれほどの馬鹿な者は世の中にもあんまり有まいと思ふ故に孫やひこの爲にはなしてきかせるか能く不法もの馬鹿者のいましめにするかいせあれば妾の子テは、親か親父の氣にちかつてあふくろの内で生れた夫をほんとふのあふくろか引取てうはてそなでくれたかかきのしふんよりわるさ斗してあふくろもこまつたと云事たと夫にあやちか日きんの勤め故に内には居ないから毎日くわまゝ計りいふて強情故みんなかもてあつかつたと用人の利平治と云ち、いかはなした其時は深川のあふら堀と云ふ所に居たか庭に汐入の池か有て夏は毎日く、池にはかりは入てゐた八ツにあやちか御役所より歸るから其前に池より上りしらぬ顔で遊んで居たかいつもあやちか池のにこりてゐるを利平ち、にきかれるとあいさつに困つたそふたあふくろは中風と云病ひて立居か

自由にならぬあとはみんな女計りたからはかにしていたつらのしたいだけして日をあくつた兄き  
は別宅してゐたからなにもしらなんたあれか五ツの年前町の仕事師の子の長吉と云やつと帆けん  
くわをしたか向ふは年もおれより三つばかり多きい故ちれか帆をとつて破り糸もとりおつた故む  
なくらを取てきりいして長吉のつらをふつた故くちひろをふらこはして血が大そふ流れてなきあ  
つたそのときおれか親父か庭の垣根から見ておつて侍を迎ひによとしたから内へかへつたら親父  
かおこつて人の子にきつをつけてすむかすまぬかおのれのよふなやつはすておかれすとて様のは  
しらにおれをくゝらして庭下駄てあたまをふちやふられたいまにそのきつかはけてくほんてゐる  
かさかやきをする時はいつにてもかみそりかひつかゝつて血が出るそのたひ長吉の事を思ひ出す  
おふくろかほふほより來たくわしをしまつておくとぬすみ出して食てしまふ故方々へかくして  
おくをいつもぬすむ故親父にはいはれす岡つた逸跡はおふくろかおれをつれて來た故親父にはみ  
んなあれかわるいたづらはかくしてくれたあととの家來はおふくろをあそれで親父におれか事は少  
しもいふとはならぬ故あはれほふないをたつた五月あやめをふきしか一日に五度までとつてしょ  
婦打をした利平おやちかあんまりたといつて親父にいつけたか親父かいふには子供はげんきてな  
ければ醫師にかかる病人になるはいく度もふき直し菖蒲を澤山買入よといつた故利平も菖蒲かな

夢

醉

獨

言

くて困つたとあれか十六七才のときはなしたこのおやちも久しうとめて兄の代には信濃國まで  
も供して行あつたか兄きかつかつた侍はみんな中間より取立て信州五年つめの後江戸にて不殘御  
家人のかふを貰てやられたか利平は隠居してかふの金を貢つて身よきの處へかゝりてか車を不殘  
其やつにどられてしもつた兄きの家へ來たか經ふはいかしやまにしてかあいそうちからあれか世  
話をしてほふつにし千ヶ寺にたしてやつたかまもなく又きたから谷中のかんのふ寺の堂はんにい  
れてあるたかほどなく死にあつたよあれか三十ばかりのときた

あれ七ツの時今のかへよふしにきたかそのとき十七歳といつてげし事もすの前かみをあとして養  
家の方で小普請支配石川右近將監と組頭の小尾大七郎に初て判元の時てあつたか其時は小吉とい  
つたか頭か年は幾ツ名はなんどといふときあつた故小吉年は當十七歳といつたら石川か大きな  
口をあいて十七にはふけたとてわらいあつた其時は青木甚平と云大御番養父の兄きか取持をした  
よ

あれか名は龜松と云養子にいつて小吉となつた夫から養家には祖母かひとり孫娘かひとり兩親は  
死んだ後て不殘深川へ引取り親父か世話をしたかあれかなんにもしらすに遊んではかり居た此年  
にたこにて前町と大けんくわをして先は二三十人はかりあれはひとりてたゞき合打合せしかつひ

## 夢

## 酔

## 獨

## 言

にかなはす于かばの石の上にはあいあけられてなかさをしてしとゝかたゝかれてちらしかみになつたかなきながら脇差を抜てきりちらし諸せんかなはなく思たから腹をきらんと思ひはたをぬひて石の上にすはつたら其脇に居た白子やと云米屋かどめて内へもくつて吳た夫よりしては近所の小供かみんなあれかでしたになつたよあれか七ツの時だ

深川のやしきもたひくのつはみ故本所へやしき替をおやちかして普請のてきるまで駿河臺の太田姫稻荷の向ふ若林の屋敷を當分かりて居たり其やしきは廣くつて庭も大そふにて隣に五六百坪の原かあつたかはけ物やしきどみんなかはなしたあれか八ツ計の時に親父か内中のものをよんで其原に人の形をこしらへて百ものかたをしろといつた故夜みんなかその隣の屋敷へひとりつゝいつてかのはけものゝ形の袖へ名を書た婦たを結ひ付て來るのたかみんなかこはかつてあかしかつた一はんしまひにあれか行はんてあつたか四文錢をみかきて人の形の顔へ目にはりつけるのたか夫かあれかはんにあたつて夜の九ツ半くらゐたと思たか其晩はまづくらてこまつたかどふく目を付て來たよみんなにほめられた

あれか養家のはゝどのは若い時からいぢかわるくつて兩親もいちめられて夫故に若死をしさつたかあれを毎日くちめさつたかあれもいまくしいからてほふたいにあくたいをついたかその

時親父が聞付てあこつてあれに云には年もゆかぬにはさまにむかつてをのれのよふな過言を云やつはない始終か見届けないと脇差を抜てあれに打付たか清と云妻はあやまつてくれたつけ翌年よふ／＼本所のふしんか出来て引越たがあれかるる所は表の方たかはしめてはゝとのと一所になつたそふすると毎日やかましいとはかりいひをつたからあれもこまつたよ不斷の食ものもおれにはまづいもの計くはしてにくいばゝアだと思て居た

あれは毎日／＼そとへ計り出で遊んてけんくわはかりして居たが或時龜澤町の犬があれのかつてちゐた犬と食い合て大けんくわになつたそのときはあれか方け隣の安西養次郎と云十四計のかかしらて近所の黒部金太郎同兼吉篠木大次郎青木七五三之助と高濱彦三郎にあれか弟の鐵朔と云ふと八人にてあれの門の前て町のや郎どちどたゝき合をした龜澤町は縁町の子供を頼んで四五十人計たか竹鎗を以て來たこぢらは六尺棒木刀しなるにてまくり合しかどふ／＼町のやつらを退かへした二度めには向ふにはあとなかましつて又／＼たゝき合しかあれか方かまけて八人ながら隣の瀧川の門の内へはいり息をつきたか町方には勝にのつて門を丸太にてたゝきある故また／＼八人か一生けん命になつてこんどはなすくら脇差を抜て門を開けて不残切り立しが其のいきあひにおそれ大勢がにげあつたこぢらは勝にのつて切立しもあれか弟は七ツ計だがつよくかつた一番にお

## 夢 醉 獨 言

つかけたか前町の仕立屋のかきに辨治と云やつか引返しきて弟の手を竹やりにてつきあつた其時  
あれかかけ付て辨治のみけんを切たか辨治めがしりもちをつきど婦のなかへちちおつた故つゝけ  
うちにつらを切てやつた前町より小供の親父らか出でくるやら大さわきさ夫から八人か勝どきを  
揚て引返し瀧川の内へはいり互ひによろこんだそのさわきを親父か長屋の窓より見て居ておこつ  
てあれは三十日計り目通止られおしこめにあつた弟は藏の中へ五六日むしこめられた

九ヶの時養家の親類に鈴木清兵衛と云御細工所頭を勤める仁柔術の先生にて一橋殿田安殿始諸大  
名大勢弟子を以て居る先生か横綱町と云所に居る故弟子になりにゆくへしと親父か云故いつたか  
三八五十の替古日にてはしめて替古場へ出て見た始は遠慮をしたから段々いたつらを仕出しうち  
弟子にくまれ不斷ゑらきめにあつた或日替古に行とばんの木馬場と云所にて前町の小供其おや  
ともか大勢あつまつてあれば通るをまつて居る一向にしらすして其前を通りしか夫男谷のいたつ  
ら子かきたふちころせとのゝしりあつて竹鎗ぼうちきりにてとり巻か直に刀を抜くふりはらひ  
／＼馬場の土手へかけ上り御竹藏の二間計りのぬき堀へはいり漸々にけ込しか其時羽織はかまな  
とかとろたらけになりあつた夫から御竹藏番の門番はふたん遊びに行故にいろ／＼世話をしてくれたか内へかへるか氣かひかる故たのんておくつて貰た四五十人はかりまち伏をしあつた大ま

夢 酔 獨 言

なめにあつたその後は二月ばかり龜澤町はとほらなんだか同町の縫けくやの長と云やつか門の前を通りあつたからなまくら脇差にてたゞきちらしてやつたか内の中間か漸々とめて辰の内へつれていつてはんの木馬場のしかべしのよしをそのや郎のちやによくいつたとさ夫よりは龜澤町にてあれに無禮をするものはなくなつたよ

柔術のけいこ場でみんなかぢれをにくかつて寒けいこの夜つふしと云事をする日師匠からゆるしかてゝ出席の者が食いものをしてん／＼にもち寄てくふかぢれも重箱へまんちうをいれていつたか夜の九ツ時分になると替古をやすみ皆々持參のものを出してくふかぢれもうまいものをくつてやらふと思つて居るとみんなが寄ておれを帶にてしはつて天上へくゝしあげあつた其下て不残寄おつておれかまんちうまでくひある故上よりしたゝかぢれか小便をしてやつたか取ちらした食ものへ小便かはねあつた故不残捨ててしまひあつたかその時はいゝきびだとおもつたよ

十の年夏馬の替古をはじめたか先生は深川菊川町兩番を勧る一色幾次郎と云師匠たか馬場は伊豫殿橋の六千石どる神保磯三郎と云人の屋敷て替古をするのたおれは馬かすきだから毎日／＼門前乗をしたが二月めに遠乗にいつたら道で先生に逢てこまつた故横町へにげこんだそふすると先生か次の替古にいつたらこゝとといひあつたまだくらもすはらぬくせにいらはかたく遠乗はよせ

## 夢 醉 獨 言

さいひちつた故大久保勘次郎と云先生へいつてせめ馬の弟子入したがこの師匠はいゝ先生で毎日木馬に乗れとてよくいろ／＼をして呉たよ毎月五十くら乗をすへして借馬引にそふいつて藤助傳藏市五郎と云やつの馬をかり毎日／＼馬ばかりかゝつていたがしまひには馬を買って藤助にあづけておいたか火事には不斷出た一度馬喰町の火事の時馬にて火事場へ乗込しが今井帶刀と云御使番にとがめられていつさんにげたが本所の津輕の前までおつかけちつた馬が足が達者故とふ／＼にげあふせたあとで聞ば火事場は三町手前よりは火元へ行ものではないといふ事だよ

壹度すみだ川へ乗行しが其時は傳藏といふ借馬引の馬をかり乗たが土手にて一さんにおひちらしがどこはづみか力皮がきれあぶみを片つば川へおとした其まゝかたあぶみで歸たとがある

十一の年駿河臺に鵜殿甚左衛門と云剣術の先生がある御簾中様の御用人を勤む忠也流一刀流にて銘人とて友達が咄しをつた故門弟になつたが木刀の形ばかりをしへるゆへいゝとにおもつてせいを出しいたが左右とかいふ傳受を吳たよ其替古場へおれが頭の石川右近將監のむすこがいいでしがあれの高や何がを能しつている故大勢の中であれか高はいくらだ四十俵では小給者だとつて笑ひをるが不斷のと故おれも頭の息子故内輪にしておいたがいろ／＼ばかにしをる故或とき木刀に

て思ふさまたゝきちらしあくたいをついてなかしてやつた師匠ひゞくしかられた今は石川太郎右衛門とて御徒頭を勤てゐるか古狸にて今になんにもならぬ女を見たやうな馬鹿野郎だ十二の年兄きが世話をして學問をはじめたか林大學頭の所へ連れ行やつたが夫より聖堂のき宿部や保木己之吉と佐野郡衛門と云きもいりの所へいつて大學をして貰たか學問はきらひ故毎日／＼さくらの馬場へ垣根をくぐりていつて馬ばかり乗つてゐた大學五六枚も覺しや兩人より断わりし故うれしかつた

馬にばかり乗りし故しまいには錢がなくつてこまつたからあふくろの小遣又はたくわいの金をぬすんでつかつた

兄きが御代官を勤たが信州へ五ヶ年つめきりをしたが三ヶ年目に御機嫌窺ひ江戸へ出たがそのときあれば馬にばかりかゝつてゐて錢金をつかふ故馬の替古をやめろとて先生へ断の手紙をやつた其上にてあれをひどくしかつて禁足をしろといひあつた夫から當分内にゐたがこまつたよ

十三の年の秋兄が信州へかへつたから又々諸方へ出歩行のらくらしてゐたがとにかくあれのばゝあどのがやかましくつてあればつらさへ見るどころをいひある故あれもこまつてしまひには兄よめに嘲して智慧をかりたが兄よめも氣の毒におもつて親父へはなして呉たがそこで或日親父かば

## 夢 醉 獨 言

あとのへいふには小吉もだん／＼年もどる故小身者はにたきまで自身に出来ぬと身上をばもてぬものだから以來は小吉が食物などは當人へ自身にするやうにさしやるかよいといつて呉た故猶々おれが事はかまはず毎日／＼自身ににやきをしたが醤油には水をいれておくやらさま／＼の事をするから心もちがわるくつてならなかつたよそよりくはし何にても貰へばおれにはかくして呉すしておれがきものは一つこしらへて呉ると世間中へふひちようしてわるく計ひひちらしきものがいれてならなかつた親父にいふとおれ計しかるしこんなこまつた事はなかつた

十四の年おれが思うには男は何をしても一生くはれるから上方あたりへかけおちをして一生ゐやうとおもつて五月の廿八日にも引をはきて内を出たが世間の中は一向しらずかね々七八兩計ぬすみ出して腹に巻付て先品川まで道をき／＼して來たがなんだか心ぼそかつた夫からむやみに歩行て其日は麿澤へとまつたが翌日早く起て宿を出たがどふしたらよからふとふら／＼ゆくと町人の二人連の男が跡から來てあれにどこへ行と聞からてはないと上方へゆくといつたらわしも上方まで行くから一所にゆけといひおつた故おれも力を得て一所にいつつ小田原へとまつた其時あしたは御關所だが手形はもつてゐるかといふ故そんな物はしらぬといつたら錢を二百文だせ手形を宿で貰てやるといふからそいつかいふ通りにして關所も越たが油斷はしなかつたが濱松へ留

た時は二人か道によく世話ををして奥だから少し心かゆるんてはだかで寝たが其晩にきものも大小も腹にくゝしつけた金もみむなどられた朝目がさめた故枕元を見たらなんにもないからきもがつぶれた宿屋の亭主に聞いたら二人は尾張の津島祭りに間に合ないから先へゆくから後よりこひといつて立あつたといふからあれもとほふにくれてなゐて居たら亭主かいふには夫は道中のごまのはいといふ物だわたしは江戸からの御連とおもつたが何にしろきのどくなとだどことを志してゆかしやるとてしんじつに世話をしてくれたがいふにはどこといふあてはないが上方へゆくのだといつたら何にしろじゆばん計にてはしかたがないとしたらよからふと十方にくれたが亭主が飛しやく一本くれて是まで江戸子か此海道にてはましそんな事があるからおまへも此ひしやくをもつて濱松の御城下在とも一文ツ、貰てこいとおしへたから漸々思ひ直して一日方／＼貰て歩行たか米や麥や五升ばかりに錢を百二三十文貰つて歸つた亭主いゝものにて其ばんはどめてくれた翌日先伊勢へ行て身の上を斬りてくるがよからふといふ故貰た米と麥とを三升計に錢五十文ほど亭主に禮心にやつて夫から毎日／＼こじきをして伊勢大神宮へ參つたが夜は松原又川原或は辻堂へ寐たか蚊にせめられてろくにねるとも出來ずつまらぬさまだつけ伊勢の相生の坂にて同じこじきに心易くなりそいつかいふには龍太夫といふおし乃處へいつて江戸品川宿の青物や大坂やの内よりぬけ

## 夢 醉 獨 言

參りに來たがかくのしだい故留てくれろといふかい、そうすると向ふて張面をくりてみてさめる  
 とをして吳た故龍太夫の内へいつて中の口にて其通りいつたらはかま杯きたやつが出て張面を  
 持て来てくり返し／＼見をつて奥へ通れといふからこは／＼通つたら六疊計の座敷へおれをいれ  
 て少し立て其男か来て湯へはいれといふから久しづりにて風呂へはいつたあがると鹿末だが御せ  
 んをくへとていろ／＼うまいものを出したがこれも久敷くはないから腹いつはいやらかした少し  
 過て龍太夫はかり衣にて來あつて能こそ御參詣なされたとて明日は御ふだを上ませうといふ故お  
 れはたゞはい／＼といつてむきばかりしてゐた夫から夜具蚊やなど出してお休みなされといふか  
 ら寝たが心もちがよかつた翌日は又々馳走をして御禮に吳たそこであれか思ふにはとてものとに  
 金も借りやらふと世話人へそのとをいつたが先の取つきをした男か出て来て御用でござりますか  
 といふから道中にてごまのはゐのとをいひ出して路銀を二兩計かして吳るやう頼むといつたら龍  
 太夫へ申聞すとてひつこんだ少し間だが過ておれにいふには太夫方も御らんの通り大勢さまの御  
 逗留故なか／＼手廻りまさぬ故あまり輕少たか是を御持參被下やうとて一貫文吳た夫を貰つて早  
 々にけ出した夫から方々へ參つたか錢はあるしうまいものを食ひとふしたから元の多くあみたな  
 つた龍太夫を教へて吳た男は江戸神田黒門町の村田と云紙屋の息子た夫からこゝで貰ひあそこで

黄ひとふ／＼空に駿河の府中迄歸つたなにをいふにも玄ゆばん壹枚帶はなわをしめわらぢをいつ  
 ともはひたともね／＼からさまのわるいこじきさ府中の宿の眞中ころにくわむんか何かの堂かあつ  
 たか毎はん夜はその堂の様の下へ寝た或日府中の城の脇の御紋付を門のとひらにつけた寺がある  
 か其寺の門の脇は竹やぶ計の所たかその脇に馬場があつて馬場の入口に石がたんとつんで道から  
 そこへ一夜ねたが翌日朝早く侍が十四五人來て借馬のけいこをしてゐたかどいつも／＼へたゞか  
 むちうになつて乗てるをるからあられが目を覺しておきあかりたら馬引ともか見あつて爰にこじき  
 が寝てゐあつたふてい奴だなぜかこひの内へへゑりあつたとてさん／＼しかりあつたがいろ／＼  
 わびとして其内へかゝんで居て馬乗を見たがあんまりへたがあほいから笑つたら馬喰共か三四人  
 でしたゝかれをぶちのめして外へ引つり出しおれがいふにはみんなへただからへたゞと  
 いつたかわるいかと大聲てがなつたらば四十計の侍が出あつてこれこしき手前はどこの奴た子藏  
 のくせに侍の馬に乗をさつきからいろ／＼どくぶ國はどこだい／＼と云からあられが國は江戸だ  
 それに元からこじきではないといつたら馬はすきかといふ故すきだとといつたらひとくらのれとい  
 ひかる故玄ゆばん壹枚で乗て見せたらみんないひをるにはこの子藏めは侍の子だらふといひあつ  
 てせんの四十計の男かれの内へ一所にこひめしをやらふといふからけいこをしまひ歸るとき其

## 夢 醉 獨 言

侍の後につひていつたら町奉行屋敷の横丁のかぶき門の屋敷へはいりあれをよんと臺所の上りだんで志たゝか飯と汁をふるまつたかうまかつた其侍も奥の方で飯をくつて仕舞つて又臺所へ出てきておれの名又親の名をきゝあるからいゝかげんにうそをいつたらなんにしろ不便だからおれが所へいろとて單物を吳たそこの女房もおれがかみを結て吳た行水をつかへとて湯をくんでくれるやらいろ／＼とかいがつた今かんかへると興力とあもふよ其侍は肩衣をかけてどこへいつたか夕方内へ歸つた夜もあれを居間へよんといろ／＼身の上の事を聞たから町人の子だといつてかくしていたらいまに大小と袴をこしらへてやるから爰にて志んぼうしろといひおる六七日もいたが子のやうにして吳たおれが腹の内で思ふにはこんな内に志んぼうしてあてもなんにもならぬから上方へゆきて公家の侍にもなるほふがよからふと思ひて或ばん單物も帶もたゝんで寝所にあひて志んぼんをきて其内をにけ出して安部川の向ふの地藏堂に其晩んは寝た翌日夜のあけないうちに起てむやみに上方のほふへにけたか錢はなし食物はなし三日計はひとくとまつたか夫から一文づゝ貰つて宇都宮の地藏堂にふた晩寝たか其夜五ツ時分に堂の様かはにどんと音かする故其音にてめかさめたか人かるる様子故せきはらひをしたら其人かそこに寝て居るはなんだといひかるから伊勢參りたといつたらおれは此先の宿へばくちにゆくか此錢を手前かつひてゆけ御伊勢さまへお

さいせんを上るからといひあるゆゑ起出て其錢をかつひてゆくとたしかまリ子の入口かと思つか  
普請子屋へはいりしかおれもつゝひて入しか三十人計車座になおつてあれを見て其こしきめはな  
せ爰へ這入たと親方らしい者かいふと連の人かいふとこいつは伊勢參りたからおれか連て來たと  
いふとそんなら手前はめしてもくつてまつてろ今に御伊勢様へ御初穂を上るからとて飯酒を澤山  
ふるまつた少し過ると連てきた人か錢を三百文計紙にまひてくれた外のものも五十百廿四文十二  
文てん／＼に吳たか九百計貰たみんなかいひ居るにははやく地藏さまへいつてねろといふ故禮を  
いふてこの子屋を出るとひとりかよひどめて大きなむすひを三ツ吳たうれしくつて又半道計の所  
をもどつて地藏へさいせん上でねたか夫よりふら／＼壹文つゝ貰ひ四日市までゆくと先頃龍太夫  
ををへした男に逢た其時の禮をいつて百文計禮にやつたらは其男かうれしかつて久敷飯をはら一  
ぱいくわぬから飯をくはふとて二人て飯を買って松原にねころんて食た別れてより樂にいろ／＼の  
めに逢た咄しをして其日は一所に松原に寝たりこしきの交りは別なものた夫から二人いひ合て又  
又伊勢へいつた其男は四國の金比羅へ参るどて山田にて別れおれは伊勢に十日計ふら／＼してゐ  
たり段々四日市の方へ歸つて來たか白子の松原へ寝たはんに頭痛強くしてねつか出てくるしみし  
か翌日には何に事もしらす老て松原に寝てゐたか二日はかり立て漸く人こゝろか出て往來の人に

壹文つゝ貰ひそこに倒れて七日はかり水を呑てようゝ腹をこやしるたか其脇に半町計り引こんだ寺があつたかそこの坊主が見付て毎日ゝゝ麥のかゆを呉た故やうゝ力かついた二十二三日計松原に寝てゐたか坊主かこそ貳枚呉て壹枚は下ゝしき壹枚は夜かけて寝ろといつた故其通にしてふらゝして日を送つたか二十三日めころか足か立た故大きにうれしく竹きれを杖にして少しつつ歩行た夫から三日計りして寺へいつて禮をいつたら大事にしろとて坊主の古いかさとわらちを呉た故漸く一日に一里位つゝ歩行てきたか伊勢路ては火てたいた物は一向くはぬ故生米をかしりて歩行たら病後故に腹かなをらぬから又々氣分かわるくつて處を忘れたか或河原の土橋の下に大きな穴か横にあいてゐるからそこへはるつて五六日寝て居た或晩若い乞食か貳人來てあれにいふにはその穴は先月まで神田の者か寝處にした所たかとこへかゆきをつた故にちらか毎晩寝る處た三四日か稼ぎに出た故手前などられてこまるといふゆへ病氣のよしをいつたらそんなら三人にて寝ようとぬかして六七日一所にゐたか食ひ物に困りとふしよふと二人へいつたら伊勢にては火の物は太神宮様か外へ出すをきらいたからくれぬ故在郷へいつて見ろといふから杖にすかつてそことより十七八町の脇の村方へ這入つたら番た郎か六尺棒を持て出てなせ村へ來た其爲に入口に札か立てあるこのへらぼうめがとぬかして棒てふちをつたか病氣故に氣か遠くなつて倒れたそうする

夢 酔 獨 言

と足にて村の外へ飛ばしちつた故匍匐ばうようにして漸く橋の下へ歸て來たら二人かゞふしたといふから其あたいをいつたら手前は米はあるかといふから麥と米と三四合貰ひためたをたして見せたらそんならあれかかゆこを煮てやらうといつて德利のかけを出して土手のわきへ穴を堀て德利へ麥と米と入て水をも入れ木の枝をもしてかゆを捨てて吳たから少しくつた後は禮に二人にふるまつた夫よりあれも古とく利を見付け毎日／＼貰た米麥引わりを其德利にて煮て食たからこまらないやうになつたか夫迄は誠に食物にはこまつたたん／＼氣分かよくなつたからそろ／＼とそこを出かけて府中まで歸たかとかく錢かなくつて困るから七月調度益たから毎晚／＼町々を貰て歩行たか傳馬町と云所の米屋でちいさな小皿に引はりを入れせぎやうに見勢へならへて置から一つとつたか一つのさしに錢の壹文あるからそつと又一つとつたそふすると米をついてゐた男が見付ちつて腹を立て二度取を志あるとてにきりこぶしてあれをしたゝかふちあつたか病後故道はたに倒たやう／＼氣か付た故くわんぢん堂へいつて寝たか其時は漸く二ほん杖であるく時故か翌日は一日腰かいたくてどこへも出なんた夫からある日の晩がた飯かくひたいから二丁町へはいつたか麥や米計呉て飯をくれぬから段々貰つて行たまかり角の女郎やて客かさわいて居たかれにりふには手前は子藏のくせなせそんなに二本杖であるくわすらつたかといふをよみてござり升

## 夢 醉 獨 言

といつたらそふてあらぶよく死なゝかつたとれ飯をやらぶとて飯や肴やいろ／＼のさゐを竹の皮につゝませ錢を三百文つかんて吳たあれは地こくて地藏に逢たやうたと思つて土へ手をつみて禮をいつたら其客か手前は江戸のやうたかほんのこしきては有まいとこか侍の子たろぶとて女郎にいろ／＼はなしあるかひちりめんの袖口の付た白地のゆかたとこんちりめんのふんどしを吳たかれしかつた其晩は木賃宿へ留つて疊のうえへ寝るかいといつた故厚く禮をいつて夫から傳馬町の横町の木賃宿へ夜になると留つたか志まひには宿せんやら食物代かたまつてはらひにあかたかないから單物を六百文の志ちに入れて貰てさう／＼そこのうちを立て残りの錢をもつて上方へ又志してゆくに石部までいつて或日宿のはづれ茶やの脇にねて居たら九州の秋月と云大名の長持か二棹きたか其茶屋へ休んでると長持の親方か二人来て同しくせう木に腰をかけて酒を呑て居たかおれにいふには手前はわづらつたなとこへゆくといふから上方へ行といつたらあてか有のかといふあてはないか行といつたらそれはよせ上方はいかぬ所だそれより江戸へかへるかいとおれかつひていつてやるからまつかみさかゆきをしろとて向ふの髪結所へ連ていつてさせてそのなりては外聞かわるいとてきれいのゆかたを吳て三尺手拭を吳た何にしろ杖をつひてはらちかあかぬからかこへ乗とてかこをやどひてのせて毎日／＼よく世話をして吳た江戸へいつたら送つてやら

ふとて府中まで連て來たか其晩親方かはくちのけんくわて大きわきか出來てあれを連た親方は國へ歸るどて吳た單物を取返して木綿の古志ゆはんを吳て直に出て行あつたから今一人の親方かいふには手前は是迄連てきて貰たをとくにしてあしたは一人て江戸へ行かひよとて錢を五十文計吳あつたかあかたかないからまたこしきをしてふら／＼來て所は忘れたか或がけの所に其はんはねたかとふいふわけかけより下へ落た岩のかとにてきん玉を打たか氣絶をして居たとみえて翌日漸々人らしくなつたかきん玉かいたんてあるくことかならなんた二三日過ると少しつゝよかつたからそろ／＼あるきながら貰ていつたか箱根へかゝつてきん玉かはれてうみか志たゞか出たかかまんをして其翌日二子山まであるいたか日か暮るからそこに其晩は寝て居たか夜の明方飛脚か三度通りてあれにいふには手前ゆふへはこゝに寝たかといふ故あいといつたらつよひやつたよく狼に食れなんたこんとから山へは寝るなどいつ錢を百文計吳た夫から三枚橋へきて茶やの脇に寝て居たら人足か五六人來て子藏やなせ寝て居るといひあるから腹かへつてならぬから寝て居るといつたら飯を一はい吳た其中に四十位の男か云にはあれの所へ來て奉公しやれ飯は澤山くはれるからと云故一所にいつたら小田原の城下のはづれの横町にて喜平次と云男たあれを内へいれて女房や娘に奉公につれてきたからかあひかつてやれといつた女房娘もやれこれといつて

飯をくへどいふから飯をくつたらきらすめした魚は澤山あつて吳た一日たつとあすよりは海へ行  
 て船をこけといふから江戸にて海へは度々いつた故はい／＼といつて居たら子藏の名はなんとい  
 ふと聞から龜と云といつたらおはちのちさいのを渡して是に辨當をつめて朝七つより毎日／＼ゆ  
 け手前は江戸子たから二三日は海にて飯は食へまいからもつてゆくなと喜平かいひあるからあれ  
 は江戸にて毎日海に船を乗たからこはくないといつたらいや／＼江戸の海とは違ふといふからそ  
 れてもきかずに辨當をもつていつた夫から同船のやつか内へおれを連ていつてたのんから翌日よ  
 り早くこひと云それから毎朝／＼船へいつたかみんなか云には龜があるくなりはをかしいといひ  
 おる其はつたきん玉のはれか引すに居て水かほた／＼たれで困つたかどう／＼かくしとふしてし  
 まつたかこまつたよ毎日朝四つ時分には沖より歸つて船をあか／＼三四町引あけあみをほして少を  
 つゝ魚を貰て歸つて小田原の町へ賣にいつた夫から内へかへつてきらつをかつて來て四人の飯を  
 たくし近所のつかひをして二文三文つゝ貰た内の娘は三十計たのい／＼やつて時々すみくわんなど  
 を買ってくれた女房はやかましくてよくこき遣つた喜平は人足故内へは夜許り居たか是はやさしい  
 あやちて時にくわしなんを持って來て吳た十四五日計居ると子のやうにしあつたおれに江戸事を聞  
 てあらか所の子になれといひある故そこで考へて見たか何にしろおれも武士たか内を出て四ヶ月

夢 醉 獨 説 言

たなるにこんな事をして一生居てもつまらぬから江戸へ歸つて親父の了簡次第になるかよから  
 ふと思ひ娘へきけんをとり引きのきものゝつきたらけなのを一つ貰ひて閏八月の二日錢三百文  
 戸棚にあるをぬすんで飯を澤山辨當へつめて濱へゆくといつて夜八ツ時分起て喜平か内をにけ出  
 して江戸へ其日の晩の八ツ頃にきたかあやにく空はくらしすゝ森にて犬か出て取まひて一生けん  
 命大聲を揚てわめくと番人こしきか犬をちひちらして吳た故高輪のりやう師町のうらにはいりて  
 のり取船かあつたから夫をひくり返して其下に寝たかあんまり草臥たせいかあくる日日かあかつ  
 ても寝て居たから所のものか三四人出て目付て走かりあつたわひとをしてそこを出て飯をくひな  
 としてあたこ山へまで一日寝て居て其晩は坂を下るふりをして山の木のあけみへねた三日計人目  
 を忍んで五日めにはよる兩國橋へきて翌日ゑかふ院のはか塙へかくれて居て少しつゝ食物かつて  
 食て居たかしまひには錢かなくなつたから毎晩／＼かきねをむくり出て貰て居たか夜はくれてか  
 少ないからひもしひ思ひをしたゑかふ院奥のはか塙にこしきの頭か有かあれに仲間にはいれどぬ  
 かしあつたからそやつの所へいつてあたゝかめしを食たをして夫から龜澤町へ来て見たかなんた  
 か志きぬか高いやうたから引返して二ッ目の向ふの材木問屋のかけへいつて寝た三日めに朝早く  
 起て内へかへつたか内中小吉か歸つたとつて大きわきをしあれか部屋へはいつて寝たか十日はか

## 夢

## 醉

## 獨

## 言

りは腰とふしをしたおれか居ない内は加持祈禱いろ／＼として従弟女の惠山と云びくは上方迄尋て登たどてはなした夫から醫者か来て腰下に何か志さゐかあらぶといろ／＼いつたか其ときはまたきん玉かくつれて居たか強情にないといつてかくしてしまつたか三月ばかりたつと志つか出来て段々大そふになつた起居もできぬやうになつて二年計はそとへもゆかす内すまひをしたよ夫から親父かあれの頭石川右近將監に歸りし由をいついかにも恐入事故小吉は隠居せさ外に養子致すへきといつたら石川殿が今月かへらぬと月切故家は斷絶するがまつ／＼かへつて目出たい夫には及はぬ年取て改心すればお役にも立へしょく／＼手當して遣すへしといはれた夫から一同安心したとみなか咄した。

十六の年には漸くしつも能なつたから出勤するかいとふから逢對をつとめたか頭の宅で張面か出て居るに銘々名をかくのかあれば手前の名かけなくつてこまつた人に頼んで書て貰た石川か逢對の後て乞食をした咄しをかくさず志ろといつたから初めからのとをいつたら能く修業した今に御番入をさせてやるから心ほうをしろといはれた  
また内でははゝアどのか猶こやかましくつておのれは勝の家をつふそらとしたなどいろ／＼ひあつてこまつた故毎日／＼内には居なんた兄きの役所詰に久保島可六と云男があつたかそいつか

夢 醉 獨 言

あれをたまかして連て行きちつたかあもしろかつたから毎晩／＼いつたかかねかなくつて困て居るど信州の御料所から御年貢の金か七千兩來た役所へ預りて改て御金藏へ納るのた其時あれに番人を兄きかいひつけたから番をして居ると可六か云にはかねかなくつては吉原は面白くないから百兩計ぬすめと教へたかあれも左うたといつて千兩箱をあけて貳百兩とつたか跡かかた／＼する故こまつたら久保島か石ころを紙につゝんでいれて吳た故あらぬ顔て居たか二三月立と去れて兄きかちあつたか色々せんきをしたらあれか出したと役所の小遣めかはく状志あつた故あれに金を出せとて兄かせめたか志らぬとて強情をはり通したか兄か親父へ其譯を呴したら親父かいふには手前も年の若いうちは度々そんな事は有たつけはつかの金て小吉をきつものには出来ぬ故なんとか了簡してみやれといったそこといよ／＼あれか取たに違ひない故それきりにしてたれも志らぬ顛てをさまつたあれは其金を吉原へもつていつて壹月半ばかりにつかつてしまつたか夫から藏宿やほう／＼を頼んで金をつかつた

或日あれの従弟の處へいつたら其子の新太郎と忠次郎と云兄弟か有か一日色々呴しをして居たかその用人に源兵衛と云か居たか剣術遣ひたと云とたかあれに云にはお前さまは色々とあはれなさり升かけんくわはなさいましたとか有升か是はきもかなくつてはできませんと云からあれか

## 夢 猶 言

喧くわは大好たかちいさい内から度々あたかおもしいものたどいつた左やうて御座升かあさりて  
 は藏前の八幡の祭りであり升か一喧嘩やりましやうから一所にいらあやいまして一勝負なさいま  
 しあいつたから約束をして歸つた其日になりて夕方より番場の男谷へいつたら先の兄弟も待て居  
 てよく來た今源兵衛が湯へいつたから歸つたら出かけやうと支度をして居ると間もなく源兵衛が  
 踏つた夫より道に手はつをいひ合て八幡へいつたかみんなつまらぬやう計て相手かなかつたか八  
 檜へはいると向ふよりきいたふうのやつが二三人で鼻歌をうたつて来る故一はんに忠次郎かそい  
 つへつはを顔へ志かけつたか其野郎が腹を立て下駄てぶつてかゝりあつたそふするをあれかにき  
 りこふして横つらなくつてやると跡のやつらか惣かゝりになつてかゝりあるから目くらなくり  
 にあたらみんなにけちつたゆゑに八幡へいつたつてふら／＼して居ると人甘はかりなかとひを持  
 てきあつたなんたと思つて居ると壹人かあのや郎たどぬかして四人を取まきあつたそれから刀を  
 ぬひてきりはらつたら源兵衛が云には早く門の外へ出るがいゝ門をしめると取こになると大聲て  
 いふから四人か並て切立て門の外へ出たらそいつらの加勢とみえて又三十人計とひ口を持って出あ  
 つたから並木の入口のすなばそばの格子を後ろにして五十人計を相手にしてたゞき合たか一生け  
 ん命になつて四五人はかりきつを負したら少し先かよくなつたゆゑもやみにきりちらしとひ口

を十本程もたゞき落したそふするどまた／＼加勢かきたかはしこを持て來た其時源兵衛か云には最早かなはぬから三人は吉原へにけろ跡は私かきりはらひ歸るからと早くゆけといつたか三人なから源兵衛ひとりをちくと不便に思ひ一所にあひまくつて一所ににけやうといつたらあまへさん方はけかゝ有てはわるいから是非／＼早くにけろとひたすら云故おれか源兵衛の刀かみしかひからおれの刀を源兵衛に渡して直に四人か大勢の中へ飛こんだら先のやつははら／＼と少し跡へ引込たはつみににけたして漸々淺草の雷門で三人一一所になり吉原へいつたか源兵衛かきつかいたから引もとして番場へいつて飯をくはふと思つていつたら源兵衛は内へ先へ歸へて玄關で酒を呑て居た故に三人は安心した夫から源兵衛と又々一所に八幡の前へいつてみたちはたこ町の自身番へ大勢人か立て居るからそこへいつて聞たら八幡で大喧嘩か有て小揚の者をふつたか始まりて小あけの者か二三十人藏前のしこと師か三十人計て相手をどら／＼むとしてさはいたかとふ／＼一人もあさへすにかした其上にこちらは十八人計手負か出來た今外科かきつを縫て居るといふから四人ながら内へ歸つてあれは龜澤町へ歸つたかあんなひとい事はなかつたよ

刀は侍の大切のものだから能くさを付けるものたおれか刀は闘の藏年たが源兵衛へか志た時鏑元より三す上げ折た夫から刀のめき／＼を鑄古した此年兄きど信州へいつたか十一月末には江戸へ歸

## 夢 酔 獨 言

た源兵衛を師匠にして喧嘩のけいこを毎日——したがまひには上手になつた暮の十七日淺草市へ例の連にていつたか其時忠次郎かかたをきられたか衣類をあつくたゆゑ身へは少しもきつかつかなかつたかき物はしゆはん迄された其晩は志らすに寐たか翌朝女かきものをこたつへかけるとて見付て忠次の親父へさういつた故あれも呼によこしたから番場へいつたら忠之丞が三人並て色々いんをいつて吳た以來は喧嘩をしまいと云書付を取られた此忠之丞と云人は至ていゝ人て親類か聖人のやうたと皆々こわかつた仁た

翌年正月番場へ遊びにいつたら新太郎か忠次郎を庭で剣術を遣つて居たかあれにも遣へと云故忠次と遣つたかひとく出合頭に胴をきられた其時は氣が遠くなつた夫より二三度遣たか一本もふつ事か出来ぬからくやしかつた夫から忠次に聞て園野へ弟子入にいつた先の師匠からやかましくいつたか構はす置た夫から精を出して早く上手にならふと思つて外のとはかまはず聲古をしたか翌年より傳受も二つ黄た夫からあんまりたゝかれぬやうになつてからは同流の聲古場へ毎日——いつたか大勢か慕つてきて小吉——といふやうになつたまた他流へむやみと遣ひにいつたら其時分はまだけん術が今のやうにはやらぬから師匠か他流試合をやかましくいつた他流は勝負をめつたにはしないから皆へたか多く有た故ちのれか十八の年淺草の馬道生江政左衛門と云一刀流の師匠

夢 醉 獨 言

か居たか或時新太郎と忠次とあれと三人でいつて試合をいひ入たか早速に承知した故替古場へゆつて其弟子とあれと遣つたか初めての事故一生けん命になつて遣つたか向ふかへたであれか勝た夫から段々遣つて師匠と忠次と試合たか忠次に政左衛門か體當りをされて後の戸へつき當られて雨戸かはつれてあほのけに倒たか起る處をつゝけて腹を打れた其日は夫きりて仕舞たか始めて師匠か高まんをぬかしたかにくひから歸りにはあれか玄關の名前の札を抜打にして持て歸つた夫から方々へ行あはれた馬喰町の山口宗馬か處へ神尾源津高濱あれ四人でいつて試合をいひこんたら上へ通して宗馬が高慢をぬかした故試合をしやうどいつたら今晚は御免被下重てころといつた故歸りかけに入口ののれんを高濱か刀で切さみて奥へほふりこんて歸つた夫から同流の下谷あたり淺草本所共に他流試合をする者はみんなあれか差圖を受たから二尺九寸の刀をさして先生つらをして居たかたん／＼と井上傳兵衛先生か其頃は門人多くおもたちたやつら皆にあれか配下同前になり藤川晴八郎門人赤石郡司兵衛か弟子團野のはいふに及はすきり從ひ諸方へ他流に行たか運よくみなよかつた他流は中興先つあれかはしめた

翌年夏たか遠州掛川在の雨乃宮大明神の神主中村齋宮の息子か江戸へ國をにけて来て石川瀬兵次といふ劍術遣ひの弟子になつたから諸々をたづねてゐるから其時あれか世話ををして弟子にしてや

## 夢

## 醉

## 言

つたら瀬平次か三州吉田へ行時其齋宮方へきて息子の劍術の師何の隼太といふやつと試合をした  
か手もなく隼太か石川に負たその時石川がまん心して隼太をもゝへ乗て鎌のすこきをしてみせた  
故に名人たゞおもつて江戸へあとを追ってきたといつたか田舎者は馬鹿ものた其頃は石川は先生の  
中ても一番へたたつけ齋宮の息子は帶刀といふたかたん／＼出精して目録になつて國へ歸た

十八の年又信州へいつたか其年は兄きかきしよくかわるくつて榊木といふ村の見所場のけん見を  
おれにさせたか出役して一番惡處の場へ棹を入れ取並の時もみ一升二合五夕あつたから六合五夕  
の取並を云付たら一同百姓か嬉しかつた此月陣屋元の郡代百姓の所へ上州の仁田萬次郎か近親櫻  
井某とか云家來かねたりに来てけんくわになり刀を抜て一人百姓をきつた夫よりさわきになつた  
か大勢出て召捕どつたか二尺八寸計りの刀を眞向にかさし郡代が門をいるやつをきりある故役所  
より手代か二三人出て下知を志たかこわかつて只わめく計りたから兄かれにいつてあさへろと  
いふから一さんに飛んでいつたか門をそやつかいる所と四尺計りてはゐる事かてきぬから見て  
たらゑたかいふは私かとり様があるといつて六尺棒を一本ぶつけたか其者か二ツにきつた刀を上  
る所へつけこんて組付たかこしたからもゝへかゝりて切れた其時あれか砂をつかんては面に打つ  
けたか目に入てしかうつぶせに伏たから先刻のゑたかきんをとつて引すへた夫より二三人ゑたか

夢 醉 獨 言

打かさなつてしはつたそれから陳屋のろうへ入たあとは上州の仁田と懸合になつたきられたゑた  
は榊木の者たか七人扶持公儀より一生貰たかたはにはなつたかつよみやづらつけ  
夫からげん見ひ諸々へいつた其内江戸であふくろか死たと志らせてきたから御用を仕まつて江戸  
へ来る道て信州の退分で夕方五分月代の野郎か馬方のかけにはぬいて下にいたか兄か見付てあれ  
にどれどいふからかこの脇から十手をぬいてかけ出したら其野郎は一さん朝間の山の方へにけ  
あつたからとふ／＼あつかけて近寄たら二尺九寸の一本脇差をそりかへして御役人様御見のかし  
被下ませといつたからうぬなに見のかす物だとそはへゆくと其刀を抜おつたか引廻しをきて居た  
か其すそへ小戻か引かりて一尺計抜おつたかあれか直にどひこんて柄を持って中かへりをしたら野  
郎も一所にころんてあれの上になつたか後から平賀村の喜藤次といふ取縄か来て野郎の頭をもつ  
て引くりかへした故あれも起上りて十手にてつゝきちらした夫からなはを打て退分の旅宿へ引來  
た上田小諸より追々代官郡奉行か出てきて野郎を貰に來たいつたいこいつは小諸のろうに二百日  
計居たか或晚ろうぬけをして退分宿へきて女郎やへかゝり金をねたり壹兩とつて歸る道たといつ  
た音吉とて子分か百人も有はくち打たと役人かはなした夫から大名へ渡すと首かないから中の條  
の陳やへやつた其後そいつの刀を兄か吳たか池田鬼神丸國重と云刀たつけ二尺九寸五分あつた

れか差料にした

夫からうする時て小諸の家老の若等か休足所へきて無禮をしたから鹽澤圓藏と云手代とあれどその野郎をさらへて向ふの家老のかこへふつけてやつた上州の安中ても所の剣術遣ひたといつたか常藏と云中間の足を白鞘を抜てふいにきりにかゝつたから其時もあれど二人て打のめして走はつてやつた宿役人に引渡して聞たら酒亂だといつた十一月初めに江戸へ歸つた夫からまたへ他流へあるきさわひたか本所の割下水に近藤彌之助と云剣術の師匠か居たか夫が内弟子に小林隼太と云奴があつたか大のあはれ者て本所ではみんなかこはかつた或どき小林か智恵をかつて津輕の家中に小野兼吉と云あはれ者かあれの所へ他流をいひこんた其時は内に居た故呼入て兼吉へ逢たか中西忠兵衛か弟子て其はなしをして居ると兼めか大そうな事計ぬかし手前の刀をみせて長るのを高まんをいひをるから聞いて居たら十萬石の内にてこの位の刀をさす者かなひ私計たといふから刀を取て見たら相州物にて二尺九寸そこであれのさし料を見せたか平山先生より貰た三尺二寸の刀故兼吉め大きにひるみをつたからつけこんで高まんをいひ返してやつた夫から試合をあやうといつたらなんと思つたか今日は御免とぬかしをる故日限を約束して兼吉の所へ行つもりにして下谷連へいつてやつたら四五十人計集た故兼吉方へ手紙を持せてやつたらたゞ今屋敷へ來るとして返事

## 夢

## 酔

## 獨

## 言

はよこさず待て居たら近藤の弟子の小林めか肩衣なんとき居つてあれの所へ来て色々あつかひを入て兼吉にわひをさせるから了簡しろと云故急度念をしたら此後兼吉かおまへ様をかれ是いつたら私か首を獻しますと云からゆるしてやつた故本所はたいかいあれの字になつた

此年芝の片山前に居る湯屋か向ふ町へ轉宅をするとにて仲間もめかして山内の坊主か町奉行の榊原へ頼んてやるといつて金貳十兩とつたか元よりうそ故に其湯屋かほんどうにして右の趣を奉行所へ願出にして出したら奉行所ていふには湯屋は樽屋三右兵門の懸りたから差越願たとて取上ね故大きにこまつた中野清次郎といふ者かおれに頼んだから幸ひおれか従弟の女か樽やへよめにいつて居るから其親父の正阿彌といふものは心易ひから頼んてやらふといつたら悦て其かふ主を連て來たからおれか正阿彌の所へいづて譯をたんく咄して夫より樽やへいづてやつたら樽やか承知して奉行所より願出を下て物方利かいをいづて聞して其湯やか向ふへ引越たか嬉しがつた其禮に樽やへ三十兩正阿彌へ二十兩おれに四十兩與た其からは酒井左衛門の用人のめかけかもつて居るといひをつた湯やは向ふへ普請をすると八十兩かふか高くなると清次郎かはなした

此年又々兄と越後蒲原郡水原の陣屋へいづた六万八千巡見したか面白かつた越後には支配所の内には大百姓か居る故いろ／＼珍らしき物も見た反物金をもたんと貰てかへつた

夫から江戸へ歸たか近藤彌之助の内弟子小林隼太か男谷の方へ替流してりきんたかあはれ者故に  
 みんなかこはからてあやまつて居るから相弟子ともを馬鹿にしをる故におれにも咄しか有た故隼  
 太めを目に物見せんと思て居たか久敷風を引て寢て居るから夫なりにしておいた或日少し氣分か  
 いいから寒暖古に出たら小林も来て居て勝様一本願たいとぬかすから見る通り久しく不快て今に  
 月代もそらす居る位たかせつ角の事たから一ほん遣ひましやうといつて遣つたか先一本つゝけて  
 勝たら小林か組付たから腰車に掛けなけてやるとあふのけにたをれたから腹を足にておさへての  
 どをついてやつた其時小林か起上り面をとつてあれにいひをるには侍を土足にかけて済かすまぬ  
 がとぬかすから是は貴公の言葉にも似ぬいひ事かな最初の立相にみしゆく故差圖をして呉ると御  
 申故侍の組打は勝とかやうの物たゞ仕形をして見せたのたいひふんはあるまひといつたら御尤一  
 言もこさりませぬといひをつた夫からおれをやみ打にするぞて付をつたか時々由斷を見ては夜道  
 にてすつは抜をして切をつたか時々羽織なそ少しつゝ切たかきつはつけられた事はなかつた夫か  
 らいろ／＼しをつたかあれも氣を付て居た故に或時暮に親類に金をかりにいつた時に道の横町よ  
 り小林か酒をくらつた勢ひておれか通るといきなりにはなの先へ刀を抜てつき出た盡たから往來  
 の人も見て居る故其時おれかわさと懐手をして居て白中になまくらを抜てとふするといつたら小

林か此刀を買ましたか切るか切れぬか見て呉ろどいふから能みて骨位はきれるたらふといつたら  
鞘へ納めて別れた人か大勢立て見て居た古今のめつほうけい者た

十八の年に身代を持て兄の庭の内へ普請をして引移た其時兄から借金三百兩計の證文と家作代を  
家見に呉た親父よりは家さいの道具を一通り貰たから無借になつて嬉しかつた夫からいろ／＼の  
居候者が多く來をつたから幾らもおいたからしきに借金か出來たよ

十九の年正月替古始に男谷の替古て東間陳助と平川右金吾と大喧嘩をして互に刀を持ってけいこ場  
出てさわいたか其時もあれか引分てやう／＼和睦させた

此年より諸方の劍術遣ひを大勢子分のやうにして諸國へ出したかみんなあれか弟子たといつてあ  
るく故名か廣くなつて來た夫から本所中のいゝ顔をして居るのらくら者を不残だいししてみんな  
かあれか差圖にしたかつた故こはゐ者はなくなつたか夫には金もいるしつき合かはつたからたい  
そう借金か出來た

又他流試合を商賣のやうにして毎晩喧嘩にみんなを連て歩行た或どき平山孝藏と云先生へもいつ  
ていつも／＼和漢の英雄の咄しを聞いてはみんなをしこなして居た夫から色々馬鹿計して居たから  
身上かわるくなつて來て借金かふへる計仕方かないから出來ないそつたんにむやみに借金をして

## 夢 醉 獨 言

居たか廿一の年には一文もなくつてしやうかなかつたからさし料の刀は終や久米右衛門といふ道具やより買だ盛光の刀四十一兩て買だ故夫を賣かと思つたか夫もをしいからよしたか逢對に行にもきたまになつたから氣休めに吉原へ行た親か吳た刀やら色々質に置て相弟子へも金をかり色々として漸々三兩二分計出來たを持て其晩は吉原へいつて翌日車坂の井上の聲古場へ行劍術の道具を一組かりて直に東海道へかけ出した其日はむこくに歩行て藤澤へ泊て朝七ツ前に立て小田原へ行て先年世話になつて居た内の喜平次尋て行たか喜平もこしきか侍にはけて來たものたから初めはふしんしたか喜平の内を出た龜たといつたら漸く思ひ出していろ／＼酒などあるまつたか三百文ぬすんだ事をいひ出して金を二分二朱やつた外に酒代を二朱出して以前船へ一所に乗た野郎共を呼て酒を呑して今は劍術遣ひになつたとを嘯して笑つたらみんなかきもをつぶして居た今晩はせひとも泊れといつたか江戸より追手かくるたらふと思たから早々別れてそこを立て箱根へかかつた喜平次と外三人計三枚橋まで送てきたかそこと返して漸々關所へかゝつたか手形かないから關所の様かはへいつて劍術修行に出し由申て御關所を通して被下といつたら手形を見せうといふからそこであれかいふには御覽の通り江戸を歩行通りのなり故手形は心つかすけいこ先より不計思ひつひて上方へ修行にのほり候雪踏をはき候まゝたひ支度も致さず參りし事故相なるへく

言 言 獣 酔 夢

は御通し被下候様にといつたら番頭らしきふには御大法にて手形なき者は通さすしかし御手  
前の仰の如く御修行とあれは無餘義故御通し可申以來は御心得可被成といつた故かたしけないと  
て夫から關所をこして休んで居たら後よりきた商人かいひをるには今私か御闕を通りましたかお  
まへさまの噂をしてこさつたか今通つた侍は飛脚でもないかはん中でもなしなんたらふとて噂を  
して居ましたといふから其筈たはおれは殿様だからといつてやつた山中で日か暮でから宿引めか  
泊れとてぬかしたかとふ／＼かまんて三島までいつたら四里か間五月廿九日の日たからまくらか  
りてなんきしたせきたをぬいて腰へはさみ漸々夜の九ツ時分みしまへ来て宿へかゝつて戸をたし  
き泊て吳ろといつたら當宿はにら山様から御ふれてひとり旅は泊ねといふから問屋場へ寄てあこ  
して宿をたのんたらそいつか／＼ひをるには問屋か公儀の御觸ればやぶられぬ差圖はてきぬときめ  
るまゝそこであれかいひには海道筋みしま宿にては水戸のはりまの守か家來はとめぬかあれは御  
用の義か有り遠州雨の宮へ御きかんの便に行のたかしかたかないから是より引返して道中奉行へ  
屋敷より掛合ふゆゑ夫迄は御用物は問屋へ預け參から大切にしろとて替古道具を障子こしにかけ  
こんだそふするぞ役人共かきもをつぶし起て出をつて土に手を付をつてはりま様とは不存不調法  
恐入たとて色々あやまるから關に乗て荷物はあつけるから急度受取をよどせといつたら困りをつ

て外に二三人も出てはいつくはりいかやうにも致しますからまつゝ宿屋へいつて少しの内休足して呉ろといふ柄漸々案内といつたら脇本陣へ上ヶをつて段々不調法の譯をわひをり飯を出したから猶々やかましくいつたら人に人か重て當宿の宿役人か不殘しくするから何分にも勘辨しろと云から腹かいた故ゆるしてやつたそふすると酒肴を出して馳走しをつた其時書付をよこせといつたら夫に困つて夫も出すまいといつた故又々引くり返してやつたら金を一兩二分出して又々あやまちをつた故金か思ひよらすとれる故済してやつた其内に夜が明かいつたから寝すに三島を立たら道中かこを出したから先のしゆく迄寐て行た其はつたけいこ道具へ箱根を越し水戸と云ふ小札を書いてさして置たものたからうまくいつたなあればか思ふには是からは日本國を歩行て何そあつたら切死をしやうと覺悟して出たからはなにもこはいとはなかつた夫からたん〳〵行て大井川が九十六文川になつたから問屋へ寄て水戸の急きの御用だから早く通せといつたら早々人足が出て大切なはりま様たどぬかして一人前はらつてあれはれん臺でこし荷物は人足か越たか水かみに四人並んで水をよけて通ふしたか心もちかよかつた夫から遠州のかけ川のしゆくへ行たか昔帶刀を世話をしたとを思ひ出したから問屋へ行て雨の森の神主中村齋宮迄水府の御祈願の事て行からかこを出せといふと直にかこを出して呉たから乗て森の町といふ秋葉海道のしゆくへ行た宿てか

此人足に聞たら旦那は水戸の御使で中村さまへゆかしやると云たら一人かけ出して中村へ行きをつたか程なく中むら親子か迎ひに出てきたから内へ行てくはしく咄そふとて帶刀の座敷へ通りて齋宮へも逢たかてとふしてきたといひをるから内へ行てくはしく咄そふとて帶刀の座敷へ通りて齋宮へも逢たか江戸にて帶刀か世話になつたとを厚く禮をいひ居る夫からあれか江戸の様子をはなして思ひたしかから逢にきたといつたら親子か悦てまつゝゆふゝと逗留しろとて座敷を一間明て不自由なく世話ををして吳たから近所の劍術遣ひへ遣ひに行やら色々々書きのとをして遊んで居たか其内弟子か四五人出来て毎日／＼けいこをして居たかしよせんこゝになかく居てもつまらぬ故上方へゆかふと思つたら長州萩のはん中に城一家馬と云修行者か來たから試合をして家馬か諸々歩行た所を書寫して居る内家馬か不快て六七日逗留をしたいと云から泊つて居る内はたゝれすいろ／＼と支度をしたら齋宮は或晩色々異見をいつて吳て江戸へ歸れといふから最早けつして江戸へはかへられす此度て二度まで内を出た故夫は忝ないか聞ぬといつたらそんなら今あついさかりたから七月未までゐるといふ故世話にもなつたからふりきられも出來ぬから向ふのいふ通りにしたら悦て猶々しんせつにして吳た毎日／＼外村の若者かきてけいこをしてその後ては方々へ呼れていつたかきものは出來金も少しは出來て日々入用のものは通ひ帳か弟子よりよとしてあるから只買て遣ふ

しこまるともなくそこより七里脇に向坂といふ所にさき坂淺二郎と云か居るか江戸車坂井上傳兵衛の門人故江戸にてけいこもしてやつた者故そこへ度々行て泊て居たか所の代官故に工面もいゝからあれかとはいろ／＼して吳夫故にうか／＼として七月三日迄帶刀の内に逗留して居たか或日江戸より石川瀬兵衛か吉田へくる序に今日こゝへよるといふから座敷のそうしをして居たらあれか甥の新太郎か迎ひに來をつたから夫からしかたなしに逢たらあまゝの迎ひに外の者をやつたら切ちらして歸るまひと相談の上わたしか來たから是非とも江戸へ一度歸りての上とふとみなされどていろ／＼いふし齋宮も種々いけんをいふから一所に江戸へ歸るにした翌日齋宮方を立て段々歸るうち三島の宿で甥か氣絶して大きはぎをやつたか氣か付て夫から通し駕籠で江戸へ歸つたか親父も兄もなんにもいはぬ故少し安心して内へいつたよく日兄か呼によこしたからいつたらいろ／＼馳走をした夕方親父か隠宅から呼に來たからいつたら親父かいふにはものしは度々不婚か有から先當分はひつ足して始終の身の思案をしろしよせん直には了簡は付物ではないから一兩年考て見て身のをさまりをするかいい、兎角仁は學問かなくつてはならぬからよく本ても見るかい、といふから内へ歸つたら座敷へ三疊のをりを持て置てあれをぶちこんだそれから色々工夫をして一月もたゝぬ内をりの柱を一本ぬけるやうにして置たか能を考た所かみんなあれかわるいから起た

とたゞ氣かついたからをりの中て手習を始て夫から色々軍書の本も毎日みた友達か尋て来るからそりのそはへ呼て世間の事を聞いて頗しんで居たか廿一の秋から廿四の冬迄をりの中へはいつて居たか苦しかつた其内親父より度々書取にしていけんをいつて呉た其時隠居をして息子か三ツになるから家督をやりたいといつたらそれは悪い了簡た是まで種々の不埒かあつたから一度は御奉公てもして世間の人口をもふさき養家へも孝養をもして其上にてすきにしろと親父かいつてよこしたから尤のとたど初めて氣か付た故出勤かしたいと兄へいつたら手前か手段で勧道具衣服も出来るなら勝手にしろおれはいかひ事手前にはいり上な故今度は構はぬといつた故其時はあれかほふの下にはれ物か出て居て寝て居たか少し苦勞をかけまいと云書付を出してをりを出て翌日拜領屋敷へ行て家主へ談して金子二十兩かり出して色々入用のものを残らず捨て十日めに出勤した夫から毎日／＼上下をきて諸々のけんかを頗んであるいたか其時頭か大久保上野介といひしか赤坂喰違外たか毎日／＼行て御番入をせめたそれから以前よりいろ／＼わるいとをした事を不羈書取て只今は改心したから見出して呉ろとていつたら取扱か来て御支配よりおんみつをもつて世間を開札すから其心得にて居ろといふから待て居たら頭か或時いふには配下の者は何事もかくすか御自分は不羈行路を申聞た故所々聞合た所かいはれたよりは事大きいじかし改心して満足た是非見立

やるへし精勤しろといふから出精してあいにはけいこをして居たかの度々書上にもなつたか兎角心願かけてきぬからくやしかつた

此年親父や兄にいひ立て外宅をして割下水天野右京といつた人の地面をかりて今迄の家を引たか其時居所に困だから天野の二階をかりて居た内に俄に右京が大病にて死んだ故色々と世話をしたか其内普請も出来新宅へ移り居ると右京方にては跡取か二歳故本家の天野岩藏といふ仁か久來の意趣にて家督願の時六ヶかしくいひ出して右京の家をつぶさんとしたからいろ／＼もめて片付す其時あれか本家とは心あひから色々なためとふ／＼家督にさせた故天野の親類か悦て猶々跡のとを頼みをつたから世話をして居る内右京のあふくろか不行跡でやたらに男くるひをしあつてふたんそうとふしてこまるから折角普請をしたか其家を賣て外へこそふと思つて右京の子金次郎か頭向へいひ出したら其取扱かいふには今おまへにゆかれると跡は亂みやくになるから一两年居て吳ろといふから居たか人のとはをさめてもあれか内かをさまらねがら困て居たら或老人かをしてて吳たか世の中は恩を怨て返すか世間人の習ひたかおまへは是から怨を恩て返して見ろといつたら其通りにしたら追々内も治てやかましいはゝア殿も段々おれを能して吳るし世間の人も用ひて吳るから夫から人の出来ぬ六かしい相談事かけ合其外何事に限らず手前の事のやうに思つた

夢 醉 獨 言

がしまひにはあれにはむかつたやつらか段々したかつて来てはい／＼といひ居る是もかの老人か  
たるものとされしく同流の劔術遣ひかふらち又は遣込してとはふにくれて居る者は夫々少しつゝ  
金を持って諸方へ遣し身の安全をしてやつたか幾人か數もしれす其後あれか諸國へいつた時いか  
ひ事とくなつた事がある歩行た所てあれか名をしつて居て世話をしたつけ

天野か地面に居る内もとかく地主のこけか事てむつかしいと計かいてこまつたから三年めに同町  
の山口鐵五郎か地面へ家作か有から引越たか此鐵五郎か物領は元より心易かつたかいろ／＼内を  
かふつた時に世話をやいてやつた故其はゝア様か是非地面へこひといふから行た此年勤の外には  
諸道具の賣買をして内職にしたか始はそんはかりして居る内段々なれて来て金をとつた始は一月  
半計の内に五六十兩損をしたか毎晩／＼道具やの市に出たから隨分徳か付たなんにしろ早く御勤  
入をしやうと思つた故方々かせいてあるひて居た内に男谷の親父かしんたからかつかりとしてな  
にもいやになつたしかもそつ中風とかて一日の内死たから其時はあれは異崎いなり／＼出葬古をして  
やりに行て居たから内の小侍か迎ひにきたから一さんにかけて親父の所へいつたか最早とか切  
たそれからいろ／＼世話をして翌日かへつた毎日其事にかゝつて居た息子か五ツの時た夫から忌  
命かあいたからまた／＼かせいた

## 夢 醉 獨 言

此年十月本所猿江に摩利支天の神主に吉田兵庫と云者があつたか友達か大勢此弟子になつて神道をしたあれにも弟子になれといふから行て心易くなつたら兵庫かいふには勝様は世間を廣くなさるから私の社へ亥の日講といふを捨て被下ませとて頼たから一ヶ月三文三合の加入をする人を捨て劍術道ひはいふに及す町人百姓迄いれたら二ヶ月の中に百五六十人計出来たから名前を持て兵庫にやつたら悦て受取た夫から一年半かゝつたら五六百人になつた全くあれが御陰たから當年は十月亥の日に神前にて十二座并跡てどりを催して神いさめをしたいとて頼むから先づ講中の世話を三十八人拵へた諸々へ觸て當日參詣をして呉ろといつてやり其日には皆々見聞のためたから世話人は不殘御紋服をきて呉ろといふから其通りにしてやつたら兵庫はしやうそくをきて居た段々參詣も多く初めてこのやうなうやかな事はないとて前町へはいろ／＼商人か出て居た夫から講中か段々來ると酒肴で跡て膳を出して振まつてみると兵庫めかいつか酒に酔てゐをつて西の久保て百万石ももつたつらをしをりおれか友達の宮川鐵次郎と云に太平樂をねかしてとき遣ふ故あれかあこつてやかましくいつたら不法の挨拶をしをるゆゑ中途であれか友達をみんな連て歸つたそうすると外の者があつかひをいつてあやまるからあれかいふにはひつきよは此講中はあれか骨折故出來たを難有もあもはなひとみえて太平樂をぬかすはものをしらぬやつたから講中を

はぬけるからそふいつて呉ろといつたら大頭伊兵衛橋本庄兵門最上幾五郎と云友達か尤たか折角出來たのにもまへか断ると皆々断るゆえ兵庫今更後悔してわやまるからゆるしてやれと種々いふからそんなら以來は御旗本様へ對し慮外致すまいと云書付を出せといつたらとの様にもさせるからと云故宮川井深津金次郎といふ者と一所に兵庫の所へいつたそうすると大頭伊兵衛か道迄迎にきていふにはおまへかお入には兵庫はかり衣をきて門まで御迎に出るそれから座敷へ出て昨日の不調法をわひさせるから挨拶をしてやれといふから聞届たといへたゝそれからは講中か不殘出て馳走するから跡では決して右の咄しがして呉るなどいふからあれかいふには不殘承知したか外の者へよく／＼口留をしなさい若しも昨日の咄しをしたやつか有た其時は世話人かうそつきになるから片はしより切で仕舞つもりて來たからよくいひきかして置なさるかいとていいようをこめて歸した間もなく兵庫か宅へいつたら同人か迎に出るし世話人も不殘玄關迄てだから座敷の正面へ通つたら刀かけにあれか刀をかけて皆々座に付た兵庫も出であれに昨日は酒興上不禮の段々恐入たり以來つゝしみ可申由平伏していひをるからあれかいふには足下は裏たな神主なる故何事もしらぬと見える御旗本へ對して不禮言語同斷故咎めしなり講中漸々廣くならんとする時に最早心にあこりを生した故右の如く不禮あり隨分慎て取續く様にとて未から一同かれにいろ／＼機け

## 夢 醉 獨 言

んを取てもてなしたか酒かきらひ故に入を醉てさはくをみてるたら兵庫の甥に大竹源太郎と云仁  
 か有かおれか裏たな神主たといつたを聞をつて腹を立てきのふのしまつを宮川をたもして聞をり  
 小吉はいらぬ世話をやく宮川のとて伯父に大勢の中てはちをかゝしをつた是からはおれか相手た  
 さあ小吉出ろどつて其身御紋服をきなからはち卷をして片はたぬきて座敷へ來る故にしらぬ顔し  
 て居たら直にあれか向へ立てしたはたしをるからおれかいふには大竹は氣か違ふたそふた雑人の  
 喧嘩をみたやうにはち卷とはなんのことた武士はふしらしくするかい、此方は侍だから中間小者  
 のやうなとほきらひたといつたらふとひやつたとて吸物せんを打付だからおれかそはの刀を取て  
 立上り契約を違へてたわとをぬかすは兵庫か行届かさるからた甥か手向ふからは云合たにちかひ  
 ないからのそみ通り相手になつてやらふとていつたら大竹かくそを喰へとぬかしたから大竹より  
 先へきつはなして吳やうと思ひあつかけたらみんなにけ出した夫から兵庫か勝手の方へ大竹も  
 にけたからおひ行と折わるく兵庫かなん戸へおれかはいつたら大勢にて杉戸を入れておさへて居る  
 から出る事か出きぬ大竹は恐て丸腰でうぬか屋敷の伊豫殿橋まで歸た夫から大勢か杉戸口へ来て  
 色々といふから許してやつたら大竹と和しゆくして吳ろといひをるから大竹か不禮の事をとがめ  
 たし色々あつかひかはいつて特に大竹かよふくろかないてわひたから伊よ橋へ呼にやつて源太

夢 醉 習 言

郎か來たから段々酒醉の上恐入たとて特更相支配ゆゑに何卒御支配向へははなしをして呉るなど  
て和ほくをしたそれから酒かまた出て大竹か云ふには一はいのめといふから酒は一向呑ぬといつ  
たら夫はまた打とけぬからたどぬかす故盃をやう／＼取たら吸物わんて呑とみんなか云かんしや  
くにさはつたから吸物わんて一杯呑たら大勢よつて今一はいとぬかす夫からつゝけて十三杯呑た  
後のやつらは醉ていろ／＼不作法をしたからおれは其席では少しも間違たとけしなかつた兵庫か  
鶴籠を出したから乗て橋本庄右衛門か林町の内迄來たかそれからは何もしらなかつた内へ歸つて  
も三日ほどはのとかはれて飯かく／＼なかつた翌日みんなか尋て来て兵庫か内の様子をいら／＼は  
なして其時橋本と深津は後へ殘て居て以來は親類同様にしてくれといふから兩人か起證文を脅通  
つゝよこした夫から猶々本所中かしたかつたよ兵庫かむねかわるいから講中も斷てやつた其時お  
れか加入した分は不殘断た故段々すくなくなつてつぶれたとよ

或時橋本庄右衛門へ妙見の歸りかけにいつたら殿村南平と云男か來て居たから近付になつたか其  
男かいふにはちま／＼様は天府の神を御信心と見えまするか左様て御座り升かとていふから年來妙  
見宮を拜すといつたら左様て御座升御人相の天帝にあらはれてをりますといひをる夫からいろ  
＼唱しをしてゐると奇妙のとを種々嗤すから能聞なら南部の眞言をするとか云から面白い人た

と思てゐたら橋本か親類の病人の事を聞たら夫は死靈かたゝるといひをる故其譯を聞たら其死靈の者は男たゞつて年かつこふ其時の死やうまでつぶさに見たやうに云から橋本に聞たら其通りたと云から大まに恐れて弟子になりたいと頼たら隨分法を教てやらふと挨拶するから内へ連てきて其晩は泊た夫から真言の事をいろ／＼教て先稻荷を拜めとて其法をも教た病人の加持の法又は摩利支天の鑑通の法修行の術種々二ヶ月計に不殘教て吳た夫から此南平へそばろのなり故色々々入用をかけ謝禮色々壹年半計に四五十兩かけた本所ても大勢弟子か出來てしまひにはみろく寺の前的小倉主税と云仁の屋敷へ住てる日々病人其外加持祈禱をし御番人の祈禱何やいろ／＼諸方より頼たかあれば初め見出した故に南平も悦んでおれのとはいろ／＼骨折をしてくれた

近藤彌之助の内弟子の小林隼太もとふ／＼おれか家來になつたから毎日／＼きて色々と奉公をしなか内かない故淺草の入屋にてかなりの家作か有から買つてやつた劍術中間へ頼て替古場を出してやつた下谷むれかひいきにして吳た故内職には大小の賣買をしてゐたかしまひには金廻りかよくなつて不斷身上の世話をしをつたかわるかしこいやつて中間はみんなか色いろはくらかされた江戸を三度借倒して三州へ行つたかあれにはいつも咄してにけた又江戸へ出るといつてもあれか手紙を付で仲間中へかりたをしのわけをしてやるとみんなか損をしたとはそれなりにして吳た

とふくへ七八十兩のあひせて三州へ行をつたか今に歸てこぬ三州でとふか人間になつたと云事た  
夫はあれかてふ志へいつた時向島の兼と云男に聞た兼か遠州の秋葉へ參詣した時に鳳來寺にて逢  
たと其時は奇麗のなりて居たとおれのはなしをして二時計休て居て別れたと聞た

或日小倉主税の宅て神田黒川町の仕立屋に逢たかこいつはかけ富の箱やをするやつたかあれか懇  
意の徳山主計といふ仁か至て富を好て南平に富を頼た故に今日は富の日たから寄加持をするどつ  
て主税の宅へ大勢其むれか寄てきてより加持を始めやうとする時あれかしらすにいつたら大勢揃  
てゐるから様子を聞たら右の次第を呴す故其席にて始終の様子をみたら南平か女を呼て種々禱  
て護摩をたいてから女の中座に幣そくを持せて神いさめをして少し過ると女か口はしりて今日は  
六の大目富は何番くへかいと云故一同か嬉しかつた夫から上けて仕舞から南平へあれかいふに  
は始て見て恐入た併是は隨分出来る事たらふくいつたちは仕立やめか直に口を出して勝様か仰て  
は有か中くへようゐには寄加持は出來ぬ其譯は悉く法か有と云をるから夫は尤たか能つもつて見  
ろ南平は何處の馬の骨たか知らなるかわの通りするかあれは生れながら御旗本て身分も尊しきち  
れか一心を誠にして寄たら神は速にのふ受か有ろと思ふ故にいふのた南平に聞にものしか出すき  
た事をいふとは失禮たとしかつたは仕立屋か云には夫はあなたか御無理た神事には法と云物か

有りますとて色々ぬかす故あれか座敷の真中へ出て先つ論は無益だから手前は自分の前へ出て禮をしろゆるすといはぬ内に手前の額か上つたらあれは直に手前の飯たきにならふからさあこひといつたら大勢かけんまくをみてどりいろ／＼挨拶するからは夫はゆるしたかなんにしろ夫れ程出来様と思ふなら直に寄加持をして見ろといふから水を浴して先の女を呼て祈たら南平がした通りいろ／＼口はしりをつたから仕舞てから高まんをいつて歸つたが夫からみんなが南平へ頼むと金がいる故あれに計頼だ徳山の妹を一度南平に寄て呉ろと主計が頼たら生靈か付て有から二三日其生靈をはなさなければならぬ故金五兩程かゝるといつたから同人があれに咄す故三晩かゝつて咄してやつた夫から南平はあれを恨んで中が悪くなつたかけ富ても九十兩徳山と一所にどつた夫より十二十位は幾度も取たことがある

行は色々したか荷合の藤いなりへ百日夜々參詣し又は王子のいなりへも百日半田稻荷へも百日日參した水行は神前に桶を置いて百五十日三時ツ、行をしたしかも冬た其間には種々のことか有たかこゝへはもらした断食も三四度したか出来ぬと云事はないものだ

地主に代官を先代より勤た故役所の跡かあいてゐる故に水心子天秀と云刀かちの孫聲に水心子秀世と云男を呼て役所の跡へ入て刀をうつた又研やに本阿彌三郎兵衛と云の弟子に仁吉と云男か研

## 夢

## 醉

## 獨

## 言

か上手だから呼んであれの住居と分て刀を研しておれも習な夫より刀劍講と云ものゝ事を工夫して相弟子や心易仁に咄して取立て秀世又は細川主税正義並美濃部大慶直種神田の道賀又は梅山彌曾八小林真平其時代の刀鑑へ不殘刀劍講を取立てやつたか或日千住へいつて制をためしたか夫から淺右衛門乃弟子になつて土段切をして遊んだ息子は御殿へ上つてゐるから世話はなかつた息子か

## 七才の時た

地主か小高てひんほう故借金取か來て困るといふから引受て片を付てやつたか夫から地面うちの地借か九軒有たか地代も宿貢もろく／＼よこさぬからみんなかた／＼き出しておれか懲意の者を呼て置たから其後は地代其外かと／＼こほらぬから悦てやれ／＼ひ居た地主か或日御代官を願ふから異見をいつてやつたら大きに腹を立て葉山孫三郎と云手代と相談をしておれを地面を退出そふと云たからちまへは最早五十年におなりなさるから御代官は御止被成といつたらなせたと云から御代官になるには先始は千兩計いつて夫からいろ／＼家作も大破たから試百兩半もいるし皆さんか支度にも百兩として若も支配へ引越てもすると百兩半もかゝる故貳千兩の借金が出来るから其上に元メかわるいと引負も出来てとの様に儉約をして勤ても三十年は借金をぬくにかゝる故子孫か迷惑して其勘定か立ぬと遠流又は断絶になるから決而勤きのない者か勤める役ではないといつ

たら内中があつて地面を返して呉ろといひ居から地面中へ觸て不足の地代宿代を不殘集であれか懷へ入てゐてのき場所を見付るに折悪く脚氣にて久敷煩つてゐた故歩行とか出来ぬから人に頼て漸々入江町の岡野孫一郎と云相支配の地面へ移たか其時あれば地主へ地返するの禮にいつて御代官になつたら五年は持まいからとふて御心願か成就なすつたらしくしらぬ様專一に被成まし夫は云事か違たら生ては御めに懸らぬといつたらなせたと云から葉山の成立を荒増いつて歸たか案の條四年めに甲州のさわきでしくじり江戸へいつて小十人組へ組入をしたか三千兩程借金出で家來も六ヶ敷大心配をしてお負に葉山は上り屋へいつて三年程かゝつたか氣の毒だからあれか一度尋てやつたちはあまへの異見を聞ぬ故にかふなつたかとふそ家は助けない者たどいつて涙くんたからかあいそふたから段々と葉山か始末を聞いて甲州の郡代へやる手紙の下書を書て是を甲州へ遣してこうしろ大方奇徳人かたまつてはあますまい五百やそこらは出すたらふと教へてやつたらきもをつふした顔をして早々甲州へ届た其後間もなく六百兩金か出來たから家を立たか今は三十俵三人扶持たから困つてゐる江戸のかけやにも千五百兩計借か有故三人ふちはむけきりに成てるる夫故に小供が月々今にあれを尋てくれる夫からとふ／＼あまひには小普請入をさせられて百日の閉門て濟た其時の同役は井上五郎右衛門はとふ／＼改易になつた葉山も江戸の構へを喰たよ

夢 醉 獨 言

岡野へ引越してから段々脚氣もよくなつてきてから二日めにか息子が九ツの年御殿から下たか本のけいこに三ツ目向の多羅尾七郎三郎が用人の所へやつたか或日聾古に行道にて病犬に出来てきん玉を喰れたか其時は花町の仕事師八五郎と云ふ者か内へ上ていろゝ世話ををして呉たおれは内に寝てゐたからして來たから飛んで八五郎か所へいつた息子は蒲團を積て夫に寄かつてゐたから前をまくつて見たら玉か下りてゐた故幸外科の成田と云が来てゐるから命は助かるか尋たら六ヶ敷云から先息子をひとくしかつてやつたら夫て氣か走つかりとした様子故にかくて内へ連きて篠田といふ外科を地主か呼て頼たからきつ口を縫たか醫者かふるへてゐるからあれか刀を抜て枕元へ立て置てりきんたから息子か少しもなかなかつた故漸々縫て仕舞たから様子を聞たら命は今晚にも受合は出來ぬといつたから内中のやつはないで計る故思ふさま小言をいつてたゞきちらしてその晩から水をあひて金比羅へ毎晩はたか參りをして祈た始終あれかたいてねて外の者は手を付はせぬ毎日／＼あはれちらしたらば近所の者か今度岡野様へきた劔術遣ひは子を犬に喰れて氣が違たといひをつた位たかとふ／＼きつも直り七十日目に床をはなれた夫から今になんともないから病人は看病かかんしんだよ

親類の牧野長門守か山田奉行より長崎奉行に轉役したか其月水心子秀世かいひ人て虎の門外櫻田

町の尾張屋龜吉といふ安藝の小差か牧野の小差に成たかつてあれに頼た故世話ををしてやらふといつたら金を五拾兩持てきて是て牧野様か御好の物を買って上て呉ろといふからいふ／＼牧野の息子へ品物をやつたか一日おそらく外の者かなつたから尾張屋は鼻かあいた故氣の毒たから殘の金をは返すといつたら夫は水金でござり升から御遣ひ被成ませとて三十兩計呉た故其後に久せかなつた故世話ををしてやらうとおもつて呼にやつたら龜吉は疾に死たといふからそれきりにしたつけ地主の當主かとふらく者て或時揚代か十七兩たまつて吉原の茶やか願ふといひをつて困たかふだんたから誰も世話をしない故あれに頼たおれは昨今のとだから志らす金を正面して賣してやつたか其後も五兩に壹分の利の金を七十兩借て女郎を受たか皆濟目錄とかを代りにやつたとて用人や知行の者か困てゐる故に又おれに頼たから諸方の道具やよりきてゐた大小やら道具やらいろ／＼こんたんをして取かへしてやつたか一ゑん夫を返さぬからおれが困て諸方へ段々と返したか夫から萬事金のゆふづふかわるく成て困た夫につき合かばるから大迷惑をした其當分は色々道具を賣て取つゝいたか段々物がつきるから志まひには武器を拂たか年來たん精をして拂た物故をしかつたか仕方かない故不殘賣たか拂る時の半分にもならないものた志まひには四文の錢にもこまつた全く地主に立替た故だ

夢 醉 獨 言

夫から或晚地主のあまへさまがしのん一きて云には孫一郎かふしたたら故に家内中は困るから支配向へ談して隠居させて呉ろと云から取扱へも嘯したら頭の長井五右衛門へ始終を嘯して支配から隠居しろと云て出たから孫一郎も何とも云事か出来すに隠居したが後の孫一郎は十四だからみんなおれが世話をとして家督の時も一所に御城へ連て出た先孫一郎は隠居して江雪を改て刺髪した夫から家事の事もみだらになつてゐるから家來に差闇して取締方萬事口入して取極を付てやつたら程なく又々隠居が岩瀬權右衛門と云男を用人に入つていろ／＼悪法をかいて權右衛門へ給金貳拾兩に貳拾儀五人扶持やつて好の事をしをるから内中が寄て頼故に頭沙汰にして權右衛門を追出して外の用人を入れた其内に後の孫一郎のあふくろが死ぬ故隠居が又々色々もくろみをしたから其時も其一件を片付てやるし其後江雪が女郎を引受連て來た時も世話をとして柳島へ別宅を拵へてやつた夫から一年ばかり立て江雪が大病故に色々世話をしたが其時におれにいふには今度は快氣はおほつかないから悴の事は萬端頼からよめをどうして後御番入する迄は必見捨ずに世話をしてくれといふから聞届たと挨拶をしたら悦て翌日死だから又々世話をして残りなく後を片付たが世間で岡野と云ど誰もよめの呉てがないから麻布市兵衛町の伊藤權之助が娘を貰てやつたあまへさまが云には何

も持てきてがないから何にもいらぬと云から權之助へあれが掛合て百兩の持參で諸道具も高相應にして貰だから知行所の百姓もきもをつふして私共二三年諸方へ頼て奥様の事を骨を折たが岡野と聞と皆々破談になりましたが御前の御陰で殿様初一同安心して悦ます誠には御持參金も有し有難といひをつた夫迄は千五百石で道具が一つなくつて大小迄も逢對の度にかりて出る位だから世間で異ないも尤だと思た夫から普請が大破故武州相州の百姓を呼出して五六日色々理解をいつて聞して四百兩出して家作も直し大勢の厄介の身上迄捨てやつた當主の伯父の坊主である仙之助と云男にも地面内へ家作をして妻迄持してやつたら家内の者がおれを神さまのやうにいひをつた暮し方も二百兩ゆゑ三百三十兩の暮しにして厄介へは夫々壹夕年あてかひを付て替古事でも出来る様にして馬迄かはし千五百石の高位には少し過る位にしてやつたが何をいふにも借金が五千兩計ある故持こらへが馬鹿の者には出来ぬ

あれは次第にびんぼうになるし仕方がないから妙見宮へむりの願をかけて今一度困窮の直るやうにと百日の行を始めたが一日に三度づゝ水行をして食をすくなくして祈たが八九十日立と下谷の友達が寄て久敷あれが下谷邊へこないでなぜだらふと云とあれの家來分の小林隼太が此頃にびんぼうになつてよわつてゐるといつたらみんなが氣の毒な事だ今迄色々世話にもなるし恩返しに

夢 醉 獨 言

は少しても無盡をして掛捨にしてやらふかそふいつては取ぬから勝を會主にするがいゝとて相談して鈴木新二郎と云井上の弟子の免許の仁が來てあれに云には今度友達が寄て遊山無盡を拵るが最早大がいは拵たがちまへに會主をして吳ろといふから成て吳ろといふゆゑにそれはよからふが此節は困窮して中々無盡どころではないから斷て吳といつたら何にしろちまへが断ると出來ぬから加入しろと云掛金も出來ぬといつたら夫でもいゝからといふ故承知したとて歸たら二三日立ちまた新次郎がきて帳面を出して金五兩置て此後は加入の人々が來るといつて歸た故全く妙見の利益と思て夫から直に刀の賣買をしたら其月の末には第地の又兵衛と云藏宿の番頭が賴だ備前助包の刀を松平伯耆守へ賣て十一兩もうけたが又兵衛もうなき代と別に五兩吳た夫から毎晩江戸神田邊本所の道具市へ出でてもうけするがよかつたから段々金が出来る故に諸々のこん意の者が困ると聞くと助けてやつた故みんながひいきをして色々刀を持って來たから素人より買からいつも損をした事はなかつた道具の市にてはもうけの半分は諸道具やへそは又酒を貰て喰たゆゑ殿様へといひをつて外の者かかふを物を持ってくると前廣に内通してくれる故いつも損をしなかつたかさ伏の市には切者のものにあれかかさをあけさせたから見損して三匁の物をあれか壺分にも入るどかせあけか段々見て勝様は三匁五分と云から五分のそんたがらよかつた其替りにはいつも仕

## 夢 醉 獨 言

舞にはそはをたゞへ五十人來て一はいゝにても是非くはせる様にして歸したから町人は壹文貳文をあらそふ故みんなか悦て諸々の市場にはあれか乗るふとんを一ツゝ捨てあつた友達かくやしがつていつもおまへは市ては商人かはい／＼云かとふいふ譯たと云から右の次第を咄したら夫てはそんたど皆々いつたか大そふとくになつた夫から借金か四十俵の高て三百五十兩半あるから女郎を買たど思つて金の入度々段々どうちこんたら二年半計に三四十兩になつたこはいものた

何てもほどこしか専一と心得て近所は勿論困ると云物には夫それ其者か身に應してほどこしたか其せいかきくんの年には毎日／＼日々壹朱つゝ小遣にして遊んだ友達へも時の間を合してやるし毎晩／＼道具の市へ行を勤めたと思て精を出した賣物のア市といふ物を百文に付て四文ツゝのけて見たか三月の中には三兩貳分と葉錢かたまつたから刀をこしらへた

劍術の仲間では諸先生をのけていつもあれか皆の上座をしたか藤川近義先生の年廻には出席か五百八十九人有たか其時はあれか一本勝負源平の行司をした赤石孚祐先生の年忘は岡野でしたか行司取締はあれた井上の先傳兵衛先生の年忘にも頼て諸勝負の見分はあれかした男谷の替古場開にもあれか取締行司た其時分は萬事流義のもめ合相弟子口論傳受の時の言渡多分おれ計したか岡野は傳受の事は皆々おれに聞合たあれか下知にそむく者はなかつた大小の拵様并衣服又は髪形まで

下谷本所はあれの通りにしたか奇妙の事だとあもつて居るよ

其時分は諸々の道場か至て義定か立てて先生とは同座同席は弟子かしなかつた外の先生は来る  
と直に高弟が出向ひて刀を取て案内をした先生達も其玄闇迄迎ひに出たものたか此頃は物が亂て  
しらぬ顔でかまはぬかいろ／＼の様子になる物た等古も替古場へ二組と極てるたかそれもむちや  
になつて幾組も勝負をする様になつた

通り町のちふや三九郎と云者か公義のきぢかた小遣ものゝ御用たしたか段々家からどろ／＼てき  
て今は其かぶか外にも出来て一向に御用もたさすして困てみると高田藤五郎と云者かいふから段  
々聞たら此節末姫様か藝州へ御引移り故右の御用かき／＼たいと云故にこれが骨を折て御本丸の御  
年寄の瀬山さんを頼て末様の御引移りの時の師匠番くれなるさんへ頼て御用き／＼にしてやつたか  
其前に心願か出來たら紅井さんへ三十兩瀬山さんへも禮をする約束故に其事をいつてやつたら紅  
さんは大の欲はり故悦てちふ屋へ貰札を渡して先七十兩の御用を申渡た故右の金をよこせと云  
から三九郎へ咄たらいろ／＼なんしゆうをいひをつて始とは違てあれの内へもこぬゑ三九郎を  
呼て世話のへんかへをしたそふすると最早御用も下るし貰札を取上はしまゐと思ってみると一二三日  
立と貰札を取上られて御用の物は不用になつたからあれの所へかけ付て夫婦できたいろ／＼いひ

をつたか始末かかん氣にさはつた故夫なりにしてゐたか四十兩計損をして其上に大火事に焼て裏店へはゐつてゐるを聞たり世の中には三九郎の様な者か今はいくらもあるから油斷をするどく貞ふ者たおれか貳番目の兄か御代官になつてから先年三郎右門へ八兩貸したを返さねから男谷て出合て大喧嘩をして兄は其晩にけて歸つたか夫から十年計り絶交して居たか何とか思つたと見へておれの所へ手紙をよこして久々逢ぬから近所へ來たから尋て吳ろといつて金を二分よこしたから龜澤町へいつて兄よめに話したらば先から尋ねたら行かよゐといふから直にいつたら家内出でいろ／＼と馳走をして彼是といふから久敷無沙汰の段をいろ／＼云て仲直り同様にして歸たら又々兄か女房より文をよこしておれの妻へ禮をいつてよこした夫から不斷尋ねてやたり丁度支配か大兄の支配した越後水原になつたから國の風俗人氣の事を聞からおれか元いつた時の様子をけなし勤向の事も荒々しつた事は唯してやつた其翌年の春正月七日御用始の夜に何者ともしらするふせき者かはいつて物領忠藏を切殺したか其時早速に使をよこした故どんていつたか最早事かきれた翌日心當りか有たから小石川へいつたか立退たと見えてしれぬから歸た其内大兄并近親共か来て相談しておれに當分林丁に居て吳ろと云から毎晩／＼泊て居た晝は用か有から内へ歸つてゐて其月の廿五日にけんしかきて廿九日には忠藏の妻と兄か妻と忠藏の物領恵太郎を評定所へ呼出し

になつてあれど黒部萬三郎と云兄か三男か同道人になつて出たか夫から其事で一年の内月に二度位つゝ評定所へ出た或時同所御座敷にて大草能登守か與力神上八太郎と云者と大談事をしたか同所留主居の神尾藤石兵門御徒目付石坂清三郎評定所同心湯場宗十郎等か中へいりて段々八太郎か不禮の段をわひるから大草へもいはすに歸た凡壹時計のと御座敷中か大そふとふしたかいきひ

かつけ相士の者は皆々ふるべて居をつた

此年次の兄が始て越後へ行故に留主を預た夫からあれか借金もぬけたから少しつゝ遊山を始めた  
か仕舞にはいろ／＼馬鹿をやつて金を遣つたから困たしかし借金はしないやうにした林町の兄か

歸たから留主の内の事を書付て出してやつたら悦て居た

此年従弟の竹内平右衛門か娘をあれの實娘にして六合忠五郎と云三百俵の男へよめにやつた忠五郎は元より弟子故縁者になつた竹内の惣領三平か此年御番入をしかたくるしくつて出勤かてきぬから御断を申して引と云からあれかいろ／＼工夫して翌日登城させたら大御番になつた其親父か

から御断を申して引と云からあれをほめをつた

悦て一生此恩は忘れぬといつたか後年いろ／＼あれをほめをつた  
此暮に松坂三郎右衛門か越後へ行故三男の正之助と云を氣つかふ故にあれか異見をして供に連て行けといつたら聞濟て連て行つもりになつたら正之助へ供先の事をいろ／＼と教て御代官の侍は

## 夢

## 酔

## 言

支配へ行き金になるから其心得を能含てやつたか嬉しかつてかの地より歸ると禮をするといふから其約束て別たか儉見中心得の事も有から夫を手紙に書て送たかとふして取あとしたか兄かひろつて江戸へ持て歸て大兄へみせていろ／＼おれを悪くいつたら大兄か立腹しておれを呼によこした龜澤町へいつたら兄か云にはおのしはなせに正之助へ智恵をかつて色々支配所の事を教た不埒の男た其上に羅紗羽織きてゐるかなせそんなにおこりをるとしかるからあれか云々は正之助へ書狀をやりし覺はなく羅紗の羽織は小高故にみなりか悪いとあうつうか出來ぬ故無餘義きてをり升といつたら其外にも聞た事の有は此頃はもつはら吉原はいりをするよし世間にてはおぬしか年頃にはみんなやめる時分に不届の致方たゞ色々々云から御尤にはこさり升か是もやはり身上の爲につき合に参りますと云と猶々いかつて何事もあれに向て口答をする親類かあれか云事を誰もいひ返す者はないにあのし壹人計刃向ふは不埒た今一言いつてみろ手は見せぬと脇差の柄へ手を掛て云からあれか云には夫は兄ても餘り御言葉か過ませう私も上の御人た大も朋輩鷹も朋輩たからそふは切れ升まいとおれも脇差を取たらば兄よめか中へはいつていろ／＼いつておれをつれて手前の部屋へきて正之助の一件を片付ろと云から直に林町へ行て兄に逢て兄弟の情か薄とて強談したか兄か云には全く貴様の爲を思つて大兄にいつたとて情をはるから其時は役所の壹番元ノ太郎次

## 夢

## 醉

## 獨

## 言

を兄の側へ呼寄て兄が家事不取締故に是迄度々結構の御役になるとしくしりし事から當時の御役の事をも勤める氣量がないと云事の荒増をいひ聞て御役を引かいくといつてやつたそふすると夫はとふ云譯だと云から其時に兄が兄弟の手跡の眞偽を見分さる事が出来ぬ故は中々縣令は大役故に勤められぬといつてやつたら兄が怒て御用箱よりあれの手紙を出してあれに貴様か書た手跡た能みろといつてなげ出した故おれか取て燭臺を出たせて三度くり返して大音に讀て兄へ返して能にせましたといつたら兄が云にはなんと是ても彼是いふかと云からおれか云にはそこか三郎右衛門は分らぬと云者たなんと私が書た物なら讀内にけん語かすみはしますまい大勢を取扱ふ者か此位の事に心か付すは大なる御役は出來ますまい親類共か毎度私をは不勤故に小馬鹿に致しますか天下の評定所で筋違の不禮をたゞす者は是迄聞ませぬ眞偽をしらぬ兄を持たか私か不省て御座り升と挨拶したらば其座の者か一言もいふ事か出來ぬ故兄かいふには是は僞筆に違ひないからわしかあやまつたと云から左やうなら大兄へ手紙を遣して其譯を御申被成と云々其序て又通した故返事のくるまで待て居て申分ないと云大兄が返事を見てから内へ歸たか其時甥めらは脇差をさして次の間に不殘結て居たから歸り掛け甥らに向てのしらは先達中のろふせきの時其通りの心掛をしてたら忠誠はやみ／＼と殺はしまいもの其時はにけて伯父を取廻て馬鹿にも程の有ものたか親

## 夢

## 醉

## 獨

## 言

父様の子供への御教にかんしんしたといつて笑て歸たか内中かくやしかつたと其後聞だよ

夫から後は大兄も林町の兄もあれか事を氣を付て居るから少しもとんしゃくしないでいろ／＼馬鹿さわきをして日を送たか或時に林町の兄か三男の正之助か來て色々兄の咄しをしたから揚代滞にして六兩かねを出してかり宅へ林町の用人を連ていつて方をかひてやつたら兄かおこつてやかましくいふから兄よめへあれからいつて色々はくらかして其事は済たあれも三四年は大きに心かるんだから吉原へはかりはいつて居たかとふ／＼地廻りの悪輩共を手下に付たから壹人もあれに刃むかふ者なかつた其替りに金もいかい事遣つたか皆なあれかはたらきて借金をしぬ様にして道具の市へは一晩てもかゝさぬやうにしてまづけたかたりなかつた此年男谷から呼によこしたから妻へ跡の事小供の事迨いひ置て男谷へいつたら兄よめはしめみんなかないて居るから精一郎か部屋へいつたらそれから姉か云には左衛門太郎殿あまへはなせにそんなに心得違計りしなさるお兄様か此間から世間の様子を不殘聞合てこそつたか捨置ぬとて心配して今度庭へをりを拵てあまへを入れると云なさるから色々みんなか留たか少しも聞すして昨日出來上たからは晩に呼にやつてしまふると相談か極たか精一郎も留たか中々聞入かないからわたしもこまつて居るといつてあれに庭へ出て見ると云から出てみたら二重かこひにして嚴重に拵た故姉に云は段々兄様か御深切は難

## 夢

## 酔獨言

有うことさうすか今度はとぶしんてもおこしらへ被成はいへになせと云には私も今度はいると最早出すと免しても出はしませぬ其譯は此節は先本所て男立のやうになつてきまして世間も廣く私を知らぬ者は人か馬鹿にする様になりましたからこの如くになると最早世の中へは面か出す事は出来ませぬから断食をして一日も早く死ますケ様たらふと思た故に妻へも跡の事を能々いひ舍てきました思召次第になりましやう精一郎さん大小を渡しますといつて渡したら姉か此上は改心しろと云からおれが此上に改心は出来ませぬ氣か違はせぬといつたら精一か御尤たか御身の上を慎めと云から慎み様もない最早親父か死たから頼みもないから心願も疾より止めた故せめてしたい程の事をして死ふと思た故に兄へ世話を掛て氣の毒たから今より直に爰に居りましやうとて居たか精一郎かいふには必ずおまへには食を断て死ぬたらふと思た故種々親父か機嫌を見合て留たか聞入ぬ故かふなつたとて案事て呉るからなんても兄の心のやするか肝要たからをりへはいるかおれはよからふと思た先達てから友達かうす／＼内通もして呉た故疾より覺悟をして居たから一向に驚かぬといつたら何にしろ先一度御宅へ御歸り被成て妻とも相談しろと云から夫には及す先にいふ通り何も内の事は氣にかかる事はない息子か十六だからおれは隠居をして早く死たがましだ長いきをすると息子かこまるから息子の事は何分頼むといつたら其内に姉か来て一先内へ歸れ

## 夢

醉

獨

言

といふから夫から内へもどつたら夜五ツ時分迄呼にくるかと待た居たか一向沙汰かないから其晩は吉原へいつた翌日かへつた

夫から兄へ只は済ぬから書付を出せと云から夫もしなかた姉か色々心配をして諸寺諸山へ祈禱など頼んだと云事を聞たから翌年春換拶安心の爲隠居したか三十七年の年た夫からはむごく世の中をかけ廻りていろ／＼の世話をして金を取て小遣ひにしたかまたたりなかつた故色々工夫をしてあれの身の上かこふなつたは誰か大兄へ進めてつめろう／＼まで入やうとしたかとて夫をさくつたら林町の兄が先年のはちしめた意趣はらしに内中か寄てない事迄大兄へ告たといふとを慥に聞留だから其又返しに目をみせて吳様と思つて居ると三男の正之助かほふ二者故に兄が困て居ると聞なか／＼正之助を呼てたまして聞たら不穢兄か謀とを白狀したから工面をしては正之助へ金をかして遣はしたか仕舞には兄が借金か藏宿のも切しといふからふれか竹内の隠居をたましてとふ／＼兄の判を拵へさせて藏宿で百七十五兩勤めと入用か急に林町にて出来たとて正之助竹内諫訪部龍藏と云男を頼んで遣つて借たか藏宿でも三人か道具箱て肩衣迄きていつた故うたくらすによこした其金をみんな遣つて仕舞たか二月計て知て兄かりんしよく故に大そふにおこつたからとふ／＼とこ迄も知らぬ顔てしまたか藏宿ではいろ／＼せんさくをしたかしれすにしまつた

或日諫訪部か來て常盤橋にてあさつて狐はくちか有からあれに一所にいつて吳ろと是は千兩はくち故に勝と大金かはいるから壹人ては歸りか氣遣ひたかしと云からあれは其道には今まで手を出したとかないからいやたどいたら只いつて食物ても食て寝て居るど云からいつたか其時は諫訪部にも元手か三兩しかなかつたそれもおれか十兩計は貸た故だ深川へいつて見たら藏宿の亭主たの大商人か日本橋近邊より集つて五六十人計して塙を始めたかれにはいろ／＼の馳走をしてくれた故ときは町の女郎やへいつて女郎を呼て遊んで居たか夜の七ツ時分に迎をよこしたから茶屋へいつて見たら諫訪部は六百兩程勝た故おれか見切て連て歸た生れて初めてこんなはくちをみたと云たら皆か先生は人かい、といつてわらつたよ

夫から思ひ付て心易者へ高利を借たかよかつた淺草の奥山の茶屋女へ金をかじたか是はまたるかつたか其代り山中ははい／＼といひあつた故親分のやうたつけ

或日息子か柔術の相弟子に島田虎之助と云男か有たか當時てのけん術遣ひたどみんなかおそれる故この男かかん積の強氣者て男谷の弟子も皆々たゞ伏られて淺草の新堀へ道場を出して居たかおれは一度も逢たとかないから近付にいつたか其時におれか思ふには九州者の二三年先に江戸に來たといつてもまた江戸なれば仕舞から一ツたましいをぬかしてやらふと心付たからひぢりめん

のしゆはんにしやれて衣類をきて短か羽織てひやうし木の木刀を一本さして逢にいつたらは内弟子か出てとからきたといひをる故に勝の隠居だといつたら早速に虎か出て榜をはいて座敷へ通し始ての挨拶も済てからいろ／＼悴か世話の段を述て世間勲術毗しをして居たかあれのなりをやたらにみていろ／＼世上のゆうたのゝととつてあて付るやうに聞ゆるから兼而其毗しも聞て居た故に一向かまけず其日の七ツ時分になつたから虎へ云には今日は始て參つたから何そ土産にても持てど致たか御好な物もしれぬ故に手ふらて參たか酒は如何といつたらは呑ぬと云から甘物はと聞たら夫はいゝと答るからさやうなら御苦勞なから一所に淺草邊迄御出と断るをむりに引出して淺草で先奥山の女どもをなふつて歩行たらきもをつぶした顔をして跡からくるからすし飯をくうかと聞たら好たと云故にそんなら面白所てすしを上るといつて吉原へいつて大門をはいりにかゝると御免／＼と云からむりに仲の町のお龜すしへはいりて二階へ上ると間もなくひ付たすしを出した故くつて居る其時にたはこはとふたと聞たら呑か修行中故にやめて居ると云から夫から夫は小量の事た烟草をすふとも修行の出来ぬ事は有まい世間ではおまへを豪傑だと云から近付にきた其様な小量ては江戸の修行は出来ぬといつたら左やうなら今日はすはふと云故に下へひ付て烟草入きせるをかはした又酒も呑めとせめたら同断の挨拶故夫も呑した其内に日か入た故諸方へて

夢 醉 獨 説 言

うちんかどほるし折節櫻た故に風景も一入よく段々と揚やの太夫か道中するから二階より見せたら虎の云には誠に別世界たとて餘念なくみて居たから是からはおれか威勢をみせよふとてすみからすみ迄見せでりきんて見せたか大きに恐れた様子たから直に佐野槌やへはいつて女郎の氣量の其内で一番といふを上て遊んだか櫻の時分たから客か大勢て座敷かなかつたかおれの顔て明させて明日歸つたかおれは森下て別れて内へ歸つた其時に吉原であの通りの振舞は出來ぬ物たかとふいふとて顔かうれたらふとみんなに咄したとて松平の家來の松浦勘次かおれに咄したに最早隠居は吉原へいつても大丈夫だといつた故男谷にても安心したと夫からするとかないから毎日／＼くわん音吉原か遊び所て居たか虎かすゝめて香取かしま參詣をしろと云から四月初に松平内記の家中松浦勘次を供に連て下總から諸々步行た道に他流へゆきてつかひつゝいつたが先年より居候共を多く出した故夫か徳になつて路銀も遣はすに諸々をみてきたてうしにて足か痛んだから勘次を上總房州の方へ約束した所へやつておれはてうしの廣やか舟て江戸へ送つて吳だから寝ながら内へ歸つた

兄の金十郎と云ふは萬事あれ次弟になつた居るから大かひあれの内へ留て居たか或日吉原へにはかを見にいつたはん馬道で喧嘩をして見せたら金十郎はこわかつた金十郎は國ではあれ者といひたか江戸へきてはつまらぬ男であつた八月末に九州へ歸るから川崎迄送つて別れた

此前年地主の孫一郎が身上か段々わるくなつた其譯はあれか奥方を世話をして貰た時は知行所へ談して百姓のまかなひにした故何も困る事はなかつたが退々當主か酒をはじめて段々と取締もみたれになつて奥へ町人か直には入酒の相手をするやうになり伯父の仙之助が色々當主をたまして品をも大かひかりて遊びにかけるし親類の倉橋か悪法をしてかりたをし仕舞には近所の米やの娘を呼こんて毎晩亂酒するからたちまち元の通りになつてきた故仙之助かすゝめて大川丈助と云まかなひ用人を入た知行所の者は不承知故にあれに頼てとめてくれるといふししうとの權之助も頼から色々と異見をしたあけくの果はあれを地立を志やうとしたからけんくわをして遣てあやまらして済した丈助めか仙之助へとりこんで金五兩かした故とふ／＼丈助を用人にしたか段々世話をして地主を御番入をさせるとつて三十兩かすめた夫から色々立替の金かとつてきて一同くまと又々仙之助か法をして丈助を出しにかかると丈助が仕揚勘定したら壹年はかりの内に立替金か三百三十九兩になつた其張面を貯冊こしらへて一冊は手前の控にして一冊は且那へ出したか其拂方

夢 醉 獨 言

の始末か出来ぬから丈助へなんを付て退出そふとするど丈助はりこうたから或晚孫一郎か酒に酔て居る時を窺て旦那の手元へ出した張面盜て焼てしまつた故旦那の方には證こかないからくうの掛合となつけとも何とも云事か出来ぬ故大に困ていろ／＼と評議はしたか仕方かないからくうの掛合となつて壹月計立と親類が見兼て色々世話をしたか片か付ぬ故に本家の岡野田羽守か咄て家來をよこして丈助と掛合たか是も證こかないから母が明ぬ故曾我又右衛門と云伯父か又々掛合たかおなし事て目はなかあかぬ故丈助か御老中の太田備後守殿へ駕籠訴をした故六ヶ敷なつて丈助は孫一郎へ引渡しになつて頭の遠山安藝守より通達か有故丈助を受て長家へ押込て宅番を付た家來か少ないから急に雇ひ侍を二三人して村方よりも大勢呼出してさわいた夫からまいて親類中か寄て丈助へ談したか丈助は書物も能よみて辯舌もよく公邊もあかるくして大丈夫の者たから少く届せず誰も手になるものかないから番頭から相番の御張懸りをよこして掛合たか皆々云込られて歸るから持あつかつた内又々丈助か御駕籠訴をした故に前の通り遠山より孫一郎へ受取せて嚴番をして居るど今度は女房か又太田殿へかけ込た故も同しく引取て玄關の次の間へ宅番がてきたかまことに大そうとふにて其の上に孫一郎か身上かわるいから日々の入用かなるから百姓らかまこつきて金をかりにはかりかゝつて居た又頭から御張番のかゝりか替て外のものかきたか是も丈助にやり込

(七六)

られて幾度も來る度に丈助が遊びものになりにくくやうたとてみんなが笑つた夫から又々女房かぬけ出して太田殿へかけ、んな故引取て番人をふやすやら評儀やら大こんさつて居ると丈助が物領か外に勤て居たか是か又御同所へ願て出たから夫を引取中の口へ宅番か出來て三ヶ所の宅番故に加入はいるし始末は出來す大こんさつになつたか仕舞には組頭も病氣引にして頭の遠山安藝守も備後守殿て家來か大助の悴を引渡時にその使者へ云には岡野孫一郎か家來壹人の事に御番頭も御勤被成安藝守殿か其位のさはきに日數を送るといふは御役目にも御似合不被成事と主人も溝々申たといつたから直に病氣とて翌日より引籠たか外組の本多日向守か引受たか御張衆も入替り入替りして掛合たか片付かず親類もあくねはて居る柄あれか友達か云にはおまへか地面に居な柄あれ程の事をたゝ見てゐるとはどふいふ譯だと聞から夫にはまさゐの有先年より取續の出來ぬ身をおれか骨を折て食やうにしてやつたに丈助をかゝへるなどいつたらあれを地立をしやうとしらたから喧嘩をした夫からは少しも構はぬ故此度の事も一向にしらぬ顔て居るといつて毎日／＼上義太夫ふしを聞あるくかいん居したなくさみ故勝手にしをるかい／＼から小普請をさせてのかれよふとしたら丈助の憚か出奔した故又々大事になつて御老中方より引渡し者か出奔すると御届になつて評定所になる故悪くすると家名にもかゝける事ゆゑ丈助方は悦ぶし孫一方は大心配をし直に

夢 酔 獨 言

日向守へ届たから御張衆が來て大評議をする所へ丈助家内の者へ三度の食事もやらぬ故此日女房より断乳の届にて孫一方へ小供三人共差出した故に急げ子守や乳母をかゝるやうすると御張衆も色々な事か一度になつてきたから其席を立てにけて歸つた其時又夜になつて頭から外の御張衆を一人よこして明日は是非／＼御届になると云故に親類の者が不殘寄て評議まち／＼にて居たか前代見聞の事たと思つたあれは其日には虎之助が來て居て一日内に居たか夕方丈助が宅番所をぬけて出て門を出よふとすると大勢が出て留ると刀を抜てさわいたか其時女房も宅番所を出て外へかけ出すと大勢でちづかけて取らさ／＼なはをかけて連で歸たから丈助が聞て侍の女房へなはをかけた譯を聞かふと孫一の玄關へつめ懸てやかましく云から一同其挨拶が出來ぬ故色々もんぢやくするし其時に地主よりおれを呼によこしたから客が有てゆかれぬと斷たらば又々親類か是非御出被下とて度々家來をよこすから虎之助は内へ置ていつたら丈助の事を皆々か嘲して何卒工夫はないかと頼かられか云には初よりかよふになると思ふ故丈助を抱入は留たか聞すに入て私を御親類と相談して地立を被成とした故先達中より存しては居ますか御嘲しもない故しらぬていて居ましたか今となつて御頼てもなか／＼私には丈助は大敵で掛合はてきませぬから此御相談は御めんとて歸らふとしたらしうとの伊東權之助が色々譯をいつて頼むからそんなら掛け合て見ましやう

## 夢 醉 獨 言

か丈助へ返金の金を御渡し被成といつたらは夫は當のないと云からそんな空談は私には出來ぬと  
て内へかへつたか虎か云には先生は今迄人の事は色々助てやつた故今度は岡野の諸親類又は頭迄  
か懸りて出來す明日の表向になるといふ大變のそふとふを捨て見て居ては是迄の義々はみないた  
つらになるから此一件も押付てやるかいと云から隣居のいらさる事たといつたら夫はそうと此  
度は是非く孫一郎をすくつてやれといひをるからそんなら貴様かよくく岡野の諸親類へ呴す  
かよからふと虎之助か地主へ行て皆へ逢て此度の變事を左衛門太郎へともく頼んで工夫を頼  
むかよからふとおれを呼かういつたら親類中か偏に此度の一條はおまへの思召次第にして無難  
になるやう頼むと云から隨分片付て御目に掛よふと挨拶して御張衆へも逢て此度孫一郎を親共か  
一同の頼故丈助一件私か取計ふ手段も有之から取しきりて事定致しまさか日向守殿の思召はない  
かといつたら御張衆か悦て左やう相成さへ致せは御頭は申に及す是迄通り相番私共迄大慶てこさ  
るから何分御頼申といふから諸親類から連名の一札をとりて孫一よりも此度一條に付外をより一  
切口入等出させまいと云證文をとり金談其外貴様思召次第になし被下と云書付を取てそこで皆々  
へ向ておれか云には丈助一件は少も此上は私か引受るからは決而ず様の御了簡は聞ますまいか一  
ツ御畠しか有ますか夫は外てもないか此度丈助か工は失禮乍皆様の思召か悪いからた一軒はつか

の内に大金を出しやうもなし譬へ出したらは孫一郎様か御身上はなをるはつたか以前の通り段々困窮にあり被成て此節はきかひか一ツないはとふ云譯かしりませんか一向に丈助か勤め中の功見えぬと云物た全くお行届きかないから不審と私は思ひ升か何を云にも控帳をなくしたは孫一郎様の御不念と思ふ故に此度丈助か立替金を返して事を済しましやうか又は壹文もやらすに片付ませうか思召次第に致して上ませう尤丈助への勘定を致すには不殘渡しますから是て大金かいり升か御承知てこさりませう兩様の御挨拶次第て致し升といつたらは皆か相談をして勘定をして事済にしやうと云から夫は返つて致易く去ながら不害の金をやるも私は氣かないといつたら皆か云にはどぶする金をやらぬにすむと聞から夫は御咄か出来ません是迄皆様かおく病故に丈助にいろゝ恥をさらされたのた金をやらぬ様にする法は今皆様へ御咄し申して直に目てもおまほし被成るからいひませぬといつたらは皆かをかしな顔をしてゐた夫から先皆様の御出の内に丈助へ理解を申聞て宅番所も長屋はかりにして子供も丈助へ渡して番人衆へも今晚は安心して寝るやうにしませうから皆様は御安堵なつて御酒でも召上りませとて内へいひ付て酒五升出して皆へ呑せて丈助か宅へ行て掛合て直になつとくさせて女房子供も長家へ渡して其晩より番へ壹人で事か済た故親類も御張衆も種々禮をいつて歸つたか地主にては此三四月は右のさわきて上下ともつかれ

## 言 獄 酔 夢

か翌日はみんな朝寝をした夫から丈助を呼て對談して物方議證書を取替して金は十二月十九日渡す約束に定て當分手當として十五兩内渡をして是迄の通りに勘定済迄は扶持方を渡してやつた故何事なく一日の内に片か付て翌日は一日遊びに出て夫から孫一方へいつたらけ家内中か嬉しかつて彼是といひもつた夫からは金の工夫をしたかまよせん江戸ては出來ぬ故に攝州の知行所へ行く積りにして見た所か孫一郎方には久敷丈助か事て入用も過ぎて今日の手傳にも差支へ飯米も上下三四十人にてくふ米か壹升もないと云こと故に武州の知行所の者を呼出して十二月迄のまかなひをいひ付たら何といつても請ぬ故に段々理解を申渡して漸々になつとくして十二月迄の入用を請合たから夫から又々武州の次右衛門と云庄屋を呼て道中入用四十兩出させ是はおれか借にして十二月返す約束にして十一月九日に江戸を立た此年の七月支配へ有髪改名を願たか十月の十七日濟て脇坂中務少輔殿の御達したから夫より左衛門太郎を改て夢醉といつた月代かまた延ぬから當分は物髪てゐた故に道中は岡野孫一郎家來左衛門太郎七と名乗て上阪した其時虎之助へ跡を頼て中仙道を登た故熊谷宿にて次左衛門か四十兩を受取て急て登たか道より氣分か悪くつて漸々押て大阪の八軒屋へ付て二三日逗留して夫から大阪のその崎と云所の加賀虎と云男を尋て其内へいつた幸内に居たから江戸を登た譯をはなして金談を頼たら早速に受合て吳た夫から翌日御願塚と云

孫一か村方へいつたか大阪よりは二里半有といつた代官の山田新右衛門と云内へ逗留して江戸の譯を咄して翌日一村の者を呼出して金談を談したか其時代官か云には地頭の高五百石の村方にて用立金が七百兩餘有故中々御入用の金子は一錢も出来ずといつたおれか江戸で用人孫一郎へも聞たらは五百兩も有と云から其積て來たら大きに違たから先其日は夫きりにし村方一同を躊したか誠に當惑したか併出來ぬと云事はないと思つたから毎日／＼村方をふら／＼四五日歩行て見たか村中不殘ふにう故に少し心も安まつたから逗留中の入用を代官に聞たらは是迄出役の用人か来ると供壹人連てきて毎日／＼十八匁ツ、かゝると云からあれは上下五人て諸事けんやくをして肴を出しても不食代官のちふくろへ持せてやつて毎日／＼一同共に嚴敷けんやくいひ渡して供の者へは夫々に手當をして伊丹へ時々やつて内々酒食をさせたらは入用か五人て十匁ツ、たどいつて嬉しかつたから右の金談はしすに大阪へ折々いつて遊ては村方の様子をみつ／＼聞と金を出さずに退屈させて逍遙する手段をすると聞たから毎晩／＼新右衛門始子供のこらす前へ呼ては昔よりの名將智勇の仁の咄をして聞すと何れも悦て夜の更る迄聞ては寝たか或る日又々金談の事をいつたらは銀主かないと云から其時も其儘にして置たら江戸より連ていつた猪山勇八と云男か内々色々金子の事を強談した故に村方かさわ立て毎日／＼寄て村中か評議をして或時おれか旅宿を取廻て

## 夢 醉 獨 言

色々雜言をぬかして竹鎗杖を持出したから供の者はこわかつて江戸へ歸ると云からしかつてやつた夫より毎日く村内の寺へ集ては鐘を付ては押寄たみんな猪山か馬鹿などといひふれたからたおれは一向にかまはずして中間を壹人連ては御紋服きて時々其同勢の中を通ると一同かくれた夫からおれか連た侍に堀田喜三郎と云男にいひ付て毎日く晝前に大學孝經の講しやすくをさせておれも聞く新右衛門からにも聞した新右衛門は實氣の者て大に悦て色々内證て金談をもすると云から今にたまして百姓はらにあはをさかして金を出してやらふと思つて居る故逗留中はなんにも雜話は少しもいはず慎て居たかひせんかできてこまるから毎日く伊丹の小山湯へはいりにつてはかん者を付て置ては村方の容子を聞いて計居たか色々村方の者かわろたくみをすると云からなんにもしらぬ顔て居た段々日數も立たら大阪へいつて町奉行の堀伊賀守の用人下山彌右衛門は元よりおれか色々と江戸て世話をした男故夫には孫一郎か家事のとをも能々しつて居るから内談して村方へ歸つた時は代官があれに聞には御前は大阪の誰の所へいつたと云故伊賀守は元相弟子たから尋てきただといつたは夫はどいつてこわかつたか二三日過ると大阪より大勢の供廻りの使者か來て伊賀守の口上を延て箱着其外色々の物を送てよこしたから村中かみてきもをつぶし夢醉様は御奉行様と御懇意だとぬかして夫からは竹鎗又はどり巻を止たかおかしくつてならなかつた

其着を村役の者へ分てやりて外の物は代官の親類へ配てやつたか村中て御奉行様の御着たどいつて戴てくつたとよ夫から少氣伏した様子で金の手段をすると聞た故最早大丈夫とにらんたから代官へ申渡して能勢妙見へ参詣の事を申聞て供に是迄あれに敵立たやつら計連てゆこふと談して喜三郎壹人と跡は村方の悪盜ともを連て今日は孫一の家來てはいかぬおれか参詣たどいつて御紋服を着て鎗箱ていつたか其時新右衛門へ云には雨具を不残持參するやうといつたら挨拶には此節は日寄かよいから五六日は雨は降ませぬから是は持などいふからおれか云には元より妙見を信仰するから必祈ると大雨かいつも降から是非とも持と云故不省／＼物持を壹人出した夫から池田へいつて休たか駕籠の雨具かないから取に返して雨具を持って來たから段々能勢山へいつたか天氣かよくつて山上より大阪尼ヶ崎攝津の浦々を一目に見て其日は別而暖氣て拾壹ヶ山を上るにあせか出る程たか中々雨杯は降ふと誰も思はぬ故雨具持か壹人腹を立ていつた麓の茶屋へかこを預け二十五丁絶頂を登たか漸々に妙見宮へ來たから夫から水行をして本堂へ上たら大勢か見て御紋服に恐れし故や皆々外へにけ出したから靜に拜をして門の外の茶屋で休て夫から段々山を下つたか半分手前は仕合た荷が軽くなるといつたらはみんなか譬へ雲が出ても雨は降ませんと云おれか云には

下のはたこやへ行まで降せたくないとして急て山を下ると二十五丁の峯を下ると大雨が降ってきてはたこやへ三丁計にして供の者はくすぬれになつたあればかこ故に困らぬ夫から其夜中をやみなく大風雨にして明方七ツ過に漸々雨かやんたか其時にあればこたつへあたつて油断をしすに萬端氣を付たか是は悪盜共を供に連て故若も不時の變かあらふとはいはれぬ故た其晩供にきたやつらは云には夢醉様は奇妙の御方た雨の降を昨日からしつて居さしるう夫には神様の納受か有と見える御旗本は達た者た此方か百日參つてもこんなとはならぬとぬかして屈伏した容子故しめたと思つた夫から翌日そこより多田權現へ近く其日の七ツ時分御願塚村へ歸つたか其夜ひそかに猪山か寝所へきて村中か雨の事で驚てみんなか色々と氣を替た様子でどうか金か出來そうに成きましたと云からおれも悦んで居たか翌晩又々容子を聞すと金を出そうと云者と出すまいと云者半分宛になつたと聞たから翌日早く起て喜三郎を留守に置いて大阪へいつて日本橋へ芝居を見にいつて歸りに下山彌右衛門へ寄て又々談て八軒やへ泊て翌日村方へ歸た其翌日又々大阪よりして使へ色々肴を持て伊賀守の手紙かきた夫を又其晩には煮させて代官初め庄屋迄呼寄て振舞て手紙をよんて聞せた故一同に氣伏した様子か顔に顯はれた故咄しに金主の事を聞たらば今に色々骨折て居るか出来ぬと云から其晩は別れて寝たか翌日朝に成て新右衛門を呼く云には今日は少あれか悦かあるか

ら七ツ過より村方一同へ酒を振舞てやりたいから入用は渡すから尼ヶ崎よりよい肴を買って吸物其外萬事念を入れて呉ろといひ付て其日のこん立を書付て置たを渡して早く入湯かしたいから湯をわかせとて髪を喜三郎に結せて座敷へ引散した物を片付させて湯へはいり不殘連て伊丹の牛頭天王へ參詣するといつて伊丹へいひ付て白子やと云呉服屋へはいりて諸麻の上下三具と孫一か紋付の羽織白むく二ツ今ハツ時迄捨て呉ろといつたらこくもちら受合と云から其代を拂て取によこそと約束して村方へ蹄たら九ツ過た夫から家來へは道々其晩の狂言をいひ合て喜三郎を呼て床間へ白椿を生させ彼是するを七ツ半にもなつた故村方一同に代官か所へ集りて料理も出來た故一同座敷へ呼てあれか云には今日は悦の事か有て不殘まねいたか能こそ一同揃てきて忝ない今日は遠慮なく自分の内の通りくつろひて酒をだんと呑て呉とて一同へ盃を次第一々さして其上で隠し藝のある者は何てもするかいとといつてあれか昔吉原をひやかした時分の覺たはやり歌をうたつて聞して一同とも高下なく打とけろとて酒を呑したら金の談しそ違て一同笑ちて悦て色々草うたひやら出たら次第をいひおつて醉も段々廻るから最早湯つけを食ふかいとて一同食しまいて禮を延て次へ引から兼ていひ付た故中間か庭へ水を手桶に三はい汲てきたから夫をあひて白むくをきて其上へ時服をきて塵敷の具中へ蒲團を重ねてしき燭臺を左右へ並べてふどんの上へすはつてみて新

右衛門初め村方の者へも申渡す事か有から座敷へ出るやうにといはせたら一同か給酔てゐる故明日仰渡をきくたいと云から明日は兼て大阪へ参る約束故四五日留主たから一同寄て居る所か幸たから皆々服を改て地頭の口達を聞といつたらば皆漸々出たから其時に喜三郎か次の間より一同揃しと云から間のから紙を開かせて其時一同か平伏した故ちれか一同へ云には外の事てもないか先月より段々孫一郎か此度丈助一條に付ては金談を申渡す處其方共一同内談して下知の趣を聞入して銘々あのか身の用心計して一向地頭は外事にする段不届の至り是に寄ては金談相断るから左様心得ろと云と一同共難有段受をしたからあれか云には此度其方共の地頭の餘義なき頼故に病身を凌て上阪して其方中へ何分頼むと云一言を今迄の用人同様心得取合す此段不埒千萬の扱ひに及し其子細をきこふ其苔へに寄ては急度堀伊賀守へ談し明日きうめいするから挨拶に及へといつたらば一同答もなく平伏して幾重にも此段は私共が心得違ひ何卒御慈悲に御免し被下とて涙を出して詫るから夫程迄云故に愚昧の百姓とも故差免し可申とてあれか又々新右衛門へ云には右の段々恐入と云上け免し遣す夫に付ては代官始村役人共へ別段の頼がある聞届て呉ぬかといつたら一同とも私どもの身分の義御免の上は御前さまの義は身分に應し候事は御請を仕ると云から又あれか頼は外てもないか今度孫一郎一件に付ては先達から申聞る通り江戸にては太田備後守殿始諸番頭

親類中不殘寄てそふどふ故に中々今こゝに云より一同心配して丈助に身をなげて掛合故一ゑん  
 片付すして評定所にもなる所故夢醉は見るに忍す先々一條を販扱て事濟にならんとするか金子の  
 一段出来せず夫故に上阪して一同へ談しに及んたか孫一郎借用金多く一同迷惑のよし隨分少く其  
 理はなきにもあらんが其方共は岡野江雪以來此土へ住て地頭の恩の深き事はまた代々の地頭の恩  
 とあれは思ふそ其地頭の家名に及ぶ程の事を見捨るはきんじうにもおどるとあれは思ふ故此度の  
 談事はしたのた又千兩や二千兩の金は俺か大阪の奉行へ頼んたら只今直に出来るは知れてゐる夫  
 ては江雪齊より知行所を拜領したせんは有まい其譯は孫一郎か家名に懸ることに知行を捨て他借  
 して家を立たといつては第一先祖へ不孝にして民の従ぬ故と世間流布とは身を立家を起す事も出  
 来まい朋友へも顔を向られまいと思ふ故に其方共一同へ此度の功を立させて主従安堵して一同の  
 義心のあらはれ世間のそしりもぬける様と思たに如何にも金談出来ぬから夢醉か志は無になつた  
 故何事も仕出した事かなく江戸へは歸れぬ故今晚自殺して江戸への申譯はたてるから代官村役人  
 へ頼は夢醉の亡骸をは各々相談して役人共付添て江戸表の梓へ渡てくれる又勇八は直に此書狀を  
 持て歸國して孫一郎へ渡してくれる跡の供は是迄色々深切に世話をした故に兼而夫々へ預た金を  
 不残やるから明日にも立退て心の儘にするかい、喜三郎は江戸より兼々約定もして來た故今晚は

太義ながらかひしやくを頼から其上に歸國して妻子へ能く此一條を嗤し與よ最早外に云とはない  
 から此上は時服は村役人の内へ預け置てかけられぬ様にしろとてぬいて廣ふたへのせて喜三郎へあ  
 れか刀を渡して是てかいしやくしろと云付て兼て江戸にて拵へて持て行た首桶を出させて一同へ  
 向て右頬事能々心得ろと云つゝ脇差を抜てきれて卷て一同免すから顔を上で夢醉か自さつをよく  
 見ておけどいつて脇差を取直す一同か恐れながら御免／＼といつてふどんのそはへ寄たり喜  
 三郎に早く打といつたら平伏してゐるからわれには頼まぬと云ど是非なく立て後へ過たそする  
 と三四人喜三郎に取付てしはらくち見合下されませ一同か一言申上る事か有升と云から喜三郎は  
 早く申上ろといつたら先達よりの仰い義は畏ました我々家材を賣ても御受致し升といひをるから  
 最早今になつては聞入ぬといつたらは何卒御生かいをとゝまり呉ろとて色々涙なから頬故に刃物  
 を鞘へ納めたら新右衛門は腰かぬけてよふ／＼いさり出て云には全く私か御代官を勤なから行届  
 きませぬからせめては私か首を切て江戸へ送れと云からあれは隠居だから世の中へ寝みはないから如何様に成ても大  
 勢か助かりて丈助も夢醉か死たと聞たらはよもや一條も手輕に済たらふと思は故だ一同とも彌々  
 請をするからには身命に替て調達すると云一札を出せといつたらは直に連印して出したから受取

夢 醉 獨 言

た金子はいつ迄に上ませうと云から明日四ツ時迄といつてやつたら畏り升とて云たから猶々喜三郎も一同へ談して萬一間違時はわたらか切腹するあら出精しろと嚴敷いつておとしたらみんなかこわかつて翌日四ツ前に三方へのせて五百五十兩出したから請取て夫から跡は五十兩歸國迄に江戸島や迄届る約束にした孫一郎か暮し方三百二十兩を來年は二百兩にして呉ろといひをるか少もけんしはならぬとて聞入す夫から猪山勇八一昨年から四百兩程の横領か有から當人をくれろせんさくをしたいから此願は是非とも聞濟やうとの一同の訴狀故用濟の上引渡し遣すと聞き届た故勇八は振ひるるから内々安堵する様に申聞て夫から村方の是迄彼是と敵たつた者を夫々咎をいひ付水呑に落して江雪已來の古百姓へ役義をいひ付此度金を拵へし者は不殘名字を免し代官へは居屋敷荒地一ヶ年九斗餘の所を遣して夫々羽織上下を遣し夕方に漸々事濟になつたから明日は京都へ見物に行から人足をいひ付て先觸を出すへしと江戸より持し道具は不殘持行へしと云付て支度をさせ何れ勇八郎はいまだ要用も有から京都より村方へ歸て引渡し遣すへしとて供をしろとて其晩は皆々打解て咄しをしてゐると宇市源右衛門と云兩人か顕書を出したから見ると孫一より證文の有金か百五十兩此暮渡す書付故に代官へいひ付て年延を申聞ろと云と兩人を次の間へ呼て右の段を申渡兩人は彼是と云故に其時あれか出て其書付を見せろと取上で燭臺の火へかさし見るふり

(九〇)

をして焼てしまつたら兩人か色をかへてくつゝ云からあれかしたか彼是云は如何の心得た其方兩人は別てあれに是迄刃向ふたか格別の勘辨をして置に不届のやつたとおとかしてやつたらは大にこわかつた故此證文は夢醉か貰て置とて立て座敷へはいつたら兩人は恐入ましたとて早々歸つた故百五十兩は一言にてふんてしまつた何ても人は勢ひかかんしんだと思つて翌日は七ツ立て京へいつたか村中何ともいはなんた京都へ行三條の橋脇に三日逗留してほんとふに休足をして東海道を下た大磯へ泊た晩に髪を切てなで付になつて江戸へ歸た川崎へ泊て内へ案内をしたから大勢迎ひにきて十二月九日に歸つた夫から右金子を持って孫一の方へいつたちは皆か出て神様の様にいつた夫から中一日置て丈助を呼出して立替金三百三十九兩餘不殘渡して親類の書付迄取て孫一を渡した其翌日内の祖母が死たから色々佛事にかゝつた武州相州の知行所の者か百兩は上阪しても出來まいといつたか一同ともきもとけしおつたやつらも有たかたしましてやつた虎之助も大に悦た大川丈助は生涯あなた様の方へ足をしては寝ませんといつたか今に折々は機嫌を聞くくる夫から其年の暮の始末を不残して初て孫一の代になつてこんな年越をしたと地主の一同か寄て馳走をしてくれた併ながら金を捨るに是程の骨を折たは是迄一番た丈助一件へかゝつた者は皆々あれを恐た其替りには道中内は家來四人共江戸迄かこに乗て連てきたから一同が悦んだ往復て入

用か六十七八兩かゝつた翌年春は忌明に成たから諸々を遊て面白く暮した去年丈助一件の禮に孫一から丈助返金の残りは遣へといつたか夫ては暮の孫一か手當かないから壹文も貰はなかつた故夫からは遊ふか商賣てとこと云事なく出て歩行たか小遣にも困るから道具もするし色々こんだんをして居ると頭より攝州へいつた尻か出て他行留をいひ渡されたから二月より九月初迄内に計居たかせつないものた夫から孫一郎へ咄して引籠中おれか手當を貰た一月に金壹兩貳分に四人扶持宛貰た毎日——庭をいちつてなくさみにして居た九月に成て友達か頭へ出歩行の事をいつて攝州の旅行は全く夢醉かなくさみの事ではないとて孫一郎か事を荒増にいひ上吳たらはそれは無餘義とた併闘所を越たは不婿たか最早慎みも能からとて免して他行をしろといひ渡したから久敷の内どちこもつたから諸方へ飛歩行た此年中二階を建たか茶を始た故に又々圍ひを拵へて竹内と云從弟の隠居と色々道具を買集たか欲にはほふつのない物故又々金かほしく成たから近所初前町の切みせから一同に夫々分付で金を借たか三日の内に金か貳拾六兩寄たから色々茶器の物を買って毎日毎日其事に計かゝつてゐた夫からは金かなくなると女郎やより借りたり彼是と七八十兩計取た地主中間部やへいひ付てころつきを二十人計置て給金なしに遣た隣町三ヶ町大じ者女郎や町中から五

節句を地主共か持て来る故よかつた其上に女郎やへ上つてあはれる者は不殘尻を出したから所の防きに成たから長屋一むねから貳分宛不残て七兩貳分宛盆暮肴代にくれた四軒からも壹年に貳兩つゝよこした是も壹年には五六十兩に成た其上にあはれ者の茶屋をさわかす度毎にわれにいつたから人を出して済してやるから其度毎に貳分三分つゝに成たか仕舞には前町へ見せ或は商ひ物を出すにも付届をしたから何の事はない所の且那のやうた金はわく物の様にして遣たか其翌年二月から氣分悪く成て大病に成たものたから色々療治をしたらば八月末に少よく成たから押てさわいて歩行たかとふゝ十二月初から大病に成たからたかむくみて寝返りも出来ぬ様に成たか餘り大そふに感をふるつた故頭より尻か出て其月の二十二日に虎の門の内の保科榮次郎と云息子か相支配へ押こめられた大病故にかこできたか漸々翌年の夏頃に全快したさふすると本所でされか貸た道具も金々四十兩計は出して置たかなんにもみんなかよこさない様に成たされはしらないてふいに保科へ來たから心當りは不斷何もしないて居た故に今はひんほうして困るか仕方かないど漸々あきらめた

あれかまた隠居しない年た本所の北割下水の能勢妙見宮へ神鏡を一面寄心しやうと思つて講中へも談して十二兩かゝるから金を集たか其時に妙見へ毎日參詣する中で中村多仲と云紀州殿の金を

取扱ふ役人などいつて立派の侍か日参してくるから講中か神鏡の呪しをしたらは夫は何寄の事た  
 からわしも加入しやうといつて三兩の施主に付た故皆が悦て多仲様へといつたか段々と金か寄  
 て十二兩に成たからあれど預てるろといふ故勘たらは相談の上多仲へ預たら其晩に多仲か其金を  
 持て行方かなくなつたから方々さかしたか一向に手掛かなかつた或日其呪しを竹内平右衛門にし  
 たらは夫は世に云ひん用師と云物だと教てくれたから其譯を聞たら其ひん用は不斷はわつはのな  
 りてみて或は神社又は參詣の多い寺又世の中の講しやすく塙色々の所へいつて神へは信心の様にな  
 りて人の目に立様にして諸山の金の世話人の様にして人々をたまして前禮の金子を取て住居を立  
 退て又々外てはめるか一年中小商賣にして居る者た其中間か數十人有て不殘町同心並あかりひき  
 への付届として居るから大丈夫の仕事だと教てくれた萬一やかましくなると中間か寄て色々其時  
 の模様に寄ては當人を貰に来るものたか其多仲もひん用師とて笑た又飛よふしと云者は道中て難  
 又は品を賣て田舎者をたはかる者た是もひん用の少し下たのだと教た

岡野に居る時たか芝の山内の金を貸とて本所であれか知つて居る知行取旗本か七八人其金を貸た  
 かつてひん用に金をそられたか長谷川と云友達か取て困てゐるからあれか竹内から聞て居たから  
 其金を取て石川五老と云男を呼付て金を返してやつた又勝田義元といふ男も藤澤次右衛門と云者

に前禮を取れて其男の住所かしれず困たから居所をさかし出て其金を引返してやつた又或時たか長谷川寛次郎か又々齋藤監物と云者に逢て金談をしたか或日齋藤か長谷川へきて色々金談をしてゐたか長谷川ては金か貸たいから酒を出してもてなし咄して居る内に齋藤か銀山の銀の吹寄をみせた故に長谷川も珍しかりて家内の者へ見せるにてはいりて内中へ見せて元の座敷へ出て銀をはそはへ置て酒を呑てゐたまきれに其銀がなくなつて監物か只今の品を御返し被下と云から方々をさかしたかない故に何れ跡より尋出して上やうとて挨拶をして其日は齋藤か宅へ歸つたかいくらさかしても銀かないから或日又齋藤か來て云には先日の御覽に入た銀は紀州の御國の銀山より始て取たきんた夫は最早紀伊様の御覽に入た品故當分は私へ御預けになつてをり升品故に行品のしれぬと大變になり升からと段々とたまして長谷川より五兩銀の代を取たから長谷川へは最早金談は出來ぬと断た故家内一同に困たか又林丁の今井三次郎と云仁の金談にも懸つて紀州の高野の金を世話をするといつて壹兩貳分どりて前廣より右の會所の役人へ挨拶にするとなまして夫れきりにしたり今井とは馬の相弟子て不斷懇意にしたか或日今井か尋てくれていろ／＼咄しの内に長谷川か監物にかたられた咄しをしたちは今井か手前も同断の由云から監物の居所を聞たらば淺草日恩院の地面にゐると云から其金を取てやらふといつたちは夫は助才なく同心迄かけたかそれぬと

夢 醉 獨 言

云故受合て取てやらふといつて今井を歸して二三日過て齋藤監物の旅宿にいつたか夫は大そふにしてゐて座敷には神前をかさりて熊皮の三疊敷計のをすみて黒ちりめんの綿入羽織をきて刀掛には金掛の大小を掛け隅の方には兩掛を置て明荷をつみ座敷の道具もわづはの物計並へて自身ははんしゆのしゆづをつまくり何か容體らしくして小者か取次に出たがら名をいつて座敷へ通る監物は袴をはゑてあれに出て挨拶をしたら初ての名乗をしていろ／＼信心の咄しをしてから中村多仲かわしか所へくると云咄しをして其上にて兼ておまゝは多仲の御仲間の由は疾より多仲より聞てゐたか兎角わしかせ話敷て尋もしない由を尤らしくいつたらけ赤面してゐたか何か小吉へさゝやいたか程なくして吸物酒肴を出して馳走したからいゝかけんに呑て色々ひんよふの咄しをして多仲を毎度わしかつかつたか今は妙見の一條からは行衛をしらぬと咄したたら今は下總にあるといつたからおまゝは仕かけかりつはたからさそよい仕事か出来るたろふといつてやつたらそこで漸々ひん用を白狀して何ぞ遣つて呉といつた夫から付こんて今井の譯を咄して金を返して別れて歸たか何も其道より入は返て向ふは商賣人故に隠すものではない物たといつて今井に金を渡したらは厚く禮をして歸た夫から二三日すると監物かいろ／＼土産を持せておれか内へきたから色々用につかつたからそこで世間の悪法の事を多くしつた長谷川へも監物か事を咄して聞せたら大きに

恐たしよせん御番士顔て大きな顔計してゐては世の中の事は其様には知れぬものた

おれか山口へ居た内だか或女にほれて困た事か有たか其時におれか女房か其女を貰てやらふといひあるから頼たらば私へ暇をくれといふから夫はなせたといつたら女の内へ私か參つて是非ども貰ひますか先も武士だから挨拶か悪ひと私か死てもらひますからといつた其時に短刀を女房へ渡したか今晚参つて急と連てくるといふからおれは外へ遊びにいつたらば南平に出先で出合故何事なしに咄して居たらば南平か云には勝様は女なんの相か厳しい心當りはないかと尋るから右の次第を咄したらば夫は能なすつたと云から別れて又々關川さぬきと云易者と心易いから通り掛に寄たらあなたは大變た上れと云故上へ通たらば女なんの事をいひおつて今晚は釘難か有か人か大勢いたむたらふとて心當りはないかと尋るから始めよりの事を咄したらばきもをつぶして段々深切に異見をして呉て女房は貞實たといつて以來は情を懸てやれと色々云から考て見たちはおれか心得違だから夕方内へ飛て歸たら隱居に娘をたかせて男谷へ遣つて女房は書置をして内を出る處へ歸て夫から漸々止て何事もなかつたか是迄度々女房にも助けられし事も有た夫からは不便を懸て遣つたか夫迄は一日ともあれに叩かれぬと云事はなかつた此四五年俄に病身になつたも其せいかもしれぬと思ふから隱居様の様にして置は

あれか隠居する前年たか吉原か焼て諸方へ假宅か出来た其外山の宿の佐野つちやの二階で端場の  
 錢座の息子熊と云者と大けんくわをしたか熊を二階から下へなげ出してやつたか其時錢座の手代  
 か二三へきて熊を連て歸たか少し過ると三十人計長かきて来てさのつちやをとり廻ひたからわれ  
 かはたをぬいてしゆはん壹ツて高もゝ立を取て飛出してたゞき合たか三度二三町追返した其時に  
 會所から大勢出て引分たか夫からは山の宿ても女郎や一同に客を送るはゝアもかゝアもあれか顔  
 をしたからよけ／＼しをつた故何も間違かなかつた其時は刀は二尺五寸のたちを差てゐた山の宿  
 中女郎や三日戸をしめたか事なく済た其外所々にてのけんくわ幾度も有たかたひかい忘れた淺草  
 市て多羅尾七郎三郎と男谷忠次郎と其外五六入ていつた時は貳尺八寸の關の金○の刀をさしたか  
 是はさやの小尻に犬○○○きかつけて有た夫に急に七郎三郎かさそつた故袴をはかすにいつたか  
 ら雷門の内で込合故に刀かまたくらへはいつてあるかれなかつたか押合て行と侍か多羅尾のあた  
 まをさんしよのすりこ木てぶつたからあれか押れながらそいつの羽織をおさへたらば摺木て又お  
 れのかたをふちをつた故刀を振ふとしたら小尻つかへたから片はしから切倒すと大聲上たらば  
 通りの者かはつと散たから抜打に其の男のにける處をあひせたらば間合か遠くて切先て脊筋を下  
 迄切下たから帶か切て大小も懷中物も不残おとしてにけたかそふすると傳ほう院の辻番から棒を

持て壹人出たから二三へん刀をふり廻してやつたら往來の者が半丁計散たから大小と鼻紙入をひろひて辻番の内へなげこんだそれから直に奥山へいつた漸々切先か壹寸半もかゝつたと思つた大勢の込合場は長刀もよし悪たと思つた多羅尾ははけあたま故にきつか付た夫から段々けんくわをしながら兩國橋迄きたか其晩は何も外には仕事かないから内へ歸つた其外にも色々様々の事か有たか久しくなるから思ひ出されぬおれは一生の内に無法の馬鹿な事をして年月を送たけれどもいまた天道の罰もあたらぬと見えて何事なく四十二年かうして居るが身内にきつ壹ツも受た事かな其外の者は或はふちころされ又は行衛かしらすいろいろの身に成た物か數しけぬかおれは高運たゞみえて我儘のしたい程して小高の者はおれの様に金を遣つたものもなしいつもりきんて配下を多く遣つた衣類は大かひ人のきぬ唐物其外の結構の物をきて甘ひものは食ひ次第にして一生女郎は好に買って十分の事をしてきたか此頃に成て漸々人間らしく成て昔の事を思ふと身の毛か立やうた男たるものは決而あれか眞似をはしないかい孫やひこが出来たらはよく此書物をみせて身のいましめにするかい今は書にも氣のはつかしい是と云も無學にして手跡も漸く二十餘に成て手前の小用か出来るやうに成て好友達もなく悪友計と交つた故よき事は少しも氣か付ぬから此様の法外の事を英勇ごぶけつと思つた故みな心得違して親類父母妻子に迄いくらのく勞を懲けた

夢

醉

獨

言

かしれぬかんしんの旦那へは不忠至極をして頭取扱も不斷に敵對してとふ／＼今の如くの身の上に成た幸に息子か能つて孝道してくれ又娘かよくつかへて女房かおれにそむかない故に満足て此年まで無難に通たのた四十二歳成て始て人倫の道かつは君父へつかへる事諸親へむつみ又は妻子下人の仁愛の道を少しつたら是迄の所行かおそろしく成たよ／＼讀てあちあら／＼し子に孫にまよてあなかしこ

于時天保十四寅年初冬於鷺谷書す

夢 醉 道 人

「八十六頁八行不垮千萬歳の扱ひの間に　さ云ひ其上に此方に向て竹鎗さんまい是又何ぞ心得て

右様の貳拾字を脱す

九千頁十行きもなげしおたゞやつらの間に孫一が親類の中にも五拾兩出来たら勤を引さいつたの貳拾三字を脱す」